



うつせみのあなたに
短文集 その5

星野廉



目次

反義語であり同義語でもあるという話 *	3
「思い」を「はかる」 *	9
言界は限界でもあるという話 *	15
「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる *	21
言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るという話 *	27
空回りで空騒ぎする *	33
「はかる」と「わかる」のあいだで揺れる *	41
人が一時的に言葉になる *	47
シルエット *	53
痛みをつたえる名文 *	57
言葉の世界で生きる *	63
Mの世界で生きる *	69
漢字の顔と表情	

*	77
ざっくりと目指す	
*	83
知らない人	
*	89
掛け橋	
*	95
誰が語っているのでしょうか	
*	101
ここにいと、君と	
*	109
曖昧な顔	
*	113
演じる、ふりをする、なぞる	
*	119
演じる、まねる、つながる	
*	123
指す、ふれる、ふるえる	
*	129
振る/振られる	
*	135
触れる、振る、震える	
*	141
触れる、振る、揺らす	
*	147
であう、あう、でくわす	
*	153
あう、でくわす、ふれる	
*	161
眠れない夜の遊び	
*	169

過剰で過激な想像力
* 179

なぞって、真似て、なる
* 193

反義語であり同義語でもあるという話

＊

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。

こういうことをしていると、言葉を道具としてつかおうとするさいに不都合や不具合が起きるだろうと考えられます。たとえば、次のようなことが起こるでしょう。

「○△X」と言葉で何を名指すのかが、人によってズレる、つまり異なる。

＊

単純に考えてください。

「○△X」は必ずしも「○△X」ではなくなります。なぜなら、この「○△X」という文字（言葉）を読んでいるあなたと、「○△X」と書いた私は別人であり、それぞれが「○△X」について別の思いをいただくからです。

「ネコ・猫・ねこ・neko」という言葉を例に取ります。

「ネコ・猫・ねこ・neko」は必ずしも「ネコ・猫・ねこ・neko」ではなくなります。なぜなら、この「ネコ・猫・ねこ・neko」という文字（言葉）を読んでいるあなたと、「ネコ・猫・ねこ・neko」と書いた私は別人であり、それぞれが「ネコ・猫・ねこ・neko」について別の思いをいただくからです。

＊

辞書や百科事典や図鑑で「ネコ・猫・ねこ・neko」を調べれば同じことが書いてあるだろうという意見もあるでしょう。孫引きが多い出版界ですが、じっさいに試してみると、たぶん微妙に異なるはずです。

辞書での語義は定義やルールや掟というよりも、慣例であったり、だいたいの意見の一致を記述したもの、つまり報告書ですが、編者によって記述はずれます。

記述とは、既述であり、奇術もしくは詭術でもあるのです。言葉による記述でも絵や図や写真による、広義の記述や説明でも同じです。

辞典や事典や図鑑の絵や写真を見比べるとわかりやすいと思います。著作権の都合で、まったく同じ絵や写真がつかわれることはないからです。孫引き不可という意味です。

「シャム猫だ」、「よりもよってアビシニアンじゃん」、「これは子猫でしょ?」、「ずいぶん歳を取った感じの猫ちゃんね」、「あ、女の子だ」、「お、雄だ」

ぜんぶ猫ですが、自分の思えがいていた「ネコ・猫・ねこ・neko」と異なっても不思議はありません。というか、それが各人の思いの中にある「ネコ・猫・ねこ・neko」というものであり、それはつねに移りかわるものなのです。

こうした事態は、愛でも美でも哲学でも真理でも正義でも悟りでも民主主義でも死でも宇宙でも同じです。不都合や不具合が生じるという意味です。広い意味での人間関係、集団間や国家間や民族間や宗教間での争いや戦争にも至ります。あっさり言いましたが、ゆゆしい問題なのです。

*

「ヒト・人・ひと・hito」「人間・にんげん・ニンゲン・ningen」でも同じことが起きるでしょう。

ところで、女と男、こどもとおとな、未成年と成人、娘と女、娘と父、子と親、少女と少年、おばあちゃんとおじいちゃん、女性と男性って、どんな関係にありますか？

反義語とか反対語ですか？ それとも同義語とか同意語ですか？

＊

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である、というお話でした。

ごめんなさい。反義語であり同義語でもあるというお話でした。

「思い」を「はかる」

＊

「慮る」は、「おもんばかり」と「おもんばかり」と読めて、「おもいはかる」から来たようです。「思いをはかる」と考えると分かりやすいですね。駄洒落が好きな者には「重い」や「重み」を「はかる」という連想が浮かびます。

「はかる」といえば、まっ先に頭に浮かぶのがスーパーです。スーパーは「はかる」だらけなのです。どの商品にも数やグラム数や容量が記されています。それはそうですね。お金を出して買うのですから誤魔化されたくはありません。

辞書を見ると「おしはかる・押し量る・押し測る」の「おす・推す」は「押す・圧す・捺す」とも関係があるみたいです。スーパーで、野菜やラップにくるまれた魚なんかを買おうとするときに、指で押してみるということがありませんか。商品に圧力を加えるなんて、本当はやっていけないのですが、ついやってしまいます。

「身が引き締まっていて、新鮮かな?」「中が、すかすかなんてことはないだろうか?」そんな思いにつられて、指先で押したり、触ったりしちゃいます。ちょっと後ろめたい気がします。わくわく感やどきどき感も覚えます。それが「おす・推す」なのかなとも思っています。

そうそう、「重みをはかる」の「重み・重い・重さ」は「思う・思い」と語源が同じらしいという説が辞書に載っていましたが、歯切れは悪いです。

＊

思いあたることがあります。やはりスーパーでの話なのですが、よくキャベツやカボチャを手のひらに載せて「重い・重み・重さ」をはかりますね。そんなときには目を軽く閉じている人がいます。たとえ目を開いていたとしても、その目は宙を見つめているか、うつろです。

あれは、自分の「思い・思う」の中にいるときの、人の表情や身ぶりではないでしょうか。

そんなイメージというか「意味」が気に入ってしまって、このところ、そうした思いを込めて「思う・思い」「重み・重い・重さ」という言葉たちを眺めたり、つづったりしています。「おもいおもい・思いは重い」とか「おもいおもい・重い思い」なんて具合にです。

こういうのは、おふざけではなく、自分がつづっているさまざまな言葉たちの「重み・思い・意味・イメージ」の「多義性・多重性・多層性」を受けとめて楽しんでいるのです。はかっている、とも言えそうです。「はからずに・測らずに・量らずに・図らずに」、文章はつづれない気がします。

*

一方の「わかる」には、殺伐とした印象がつきまとっているように思えてなりません。なにしろ「わかる」には「分ける・切る・割る」という動作が基本にあります。血生臭いのです。ばらばら殺人とか腑分けとかマグロの解体という言葉を連想します。痛々しいのです。「はかる」という言葉には、そうしたすさんだイメージをいただくことはありません。

「分かる」の基本的な身振りは「分ける」ですから、要するに頭の中で分けて「見ているだけ」という感じがして冷たく感じます。「はかる」は「推しはかり」、形だけでも共感し同情してくれます。見ている、そのまなざしが温かいというか、心と目の動きを感じさせる言葉です。

小学校の低学年のころに、商店街へよくお使いに行かされましたが、「はかる」で思い出すのはお肉屋さんでのやり取りです。たしか「ギュウのナミを百グラムください」とこちらが言うと、いつもコロケを揚げている島倉千代子さん（もちろん、若き日のお千代さんです）にそっくりのおねえさんが「ちょっと待ってね」なんて言って出て来て、牛肉を量ってくれるのです。母とふたりの家庭で、うちがいちばん貧しかった頃でした。

「気持ちだけ、おまけしておいたからね」という言葉が必ず返ってきて、その「気持ちだ

け」という言い回しと、そう言うときのおねえさんの口調が妙に色っぽくしかも優しげで、幸せな気分になったのを覚えています。「気持ちだけ」とか「心持ち」というフレーズの響き。それが、個人的には「はかる」と結びついています。

＊

時計を思わせる上皿式の秤の受け皿に、蠟をひいたような白っぽい紙に載せられた赤いお肉が見える。そこに「気持ちだけ」が加わる。すると「気持ちだけ」針が揺れる。「思い」の「重み」が揺れる。こっちの心も揺れる。秤の動きに似ていませんか。天秤やばねを利用した秤の揺らぎ。共振。ともにふれる。

昔は近郊の農家の人たちが、野菜やお味噌なんかをリヤカーに積んで住宅街を回ってきたものです。リヤカーを押したり引いてくるおばさんたちは、棹秤（さおばかり）と呼ぶのでしょうか、目盛が刻まれた棹と分銅の位置を調節しながら、慣れた手つきでニンジンやキュウリの重さを量っていました。

その仕組みが分かったのは小学校の高学年になってからだと思いますが、そんな妙な道具で重さを「はかる」ことができるというのが、不思議でなりませんでした。お肉屋さんの秤は針と目盛で「目に見える」のですが、農家のおばさんたちの秤は得体がしれなくて、なんだかいつもズルをされているような気がしました。

いまになって考えると、そのときの私は「目に見える」秤を無視して、おばさんたちの「目に見えない」思いをはかっていたのだと思います。

言界は限界でもあるという話

＊

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。

こういうことをしていると、言葉を道具としてつかおうとするさいに不都合や不具合が起きるだろうと考えられます。たとえば、次のようなことが起こるでしょう。

「○△X」の争奪戦が起きる、つまり縄張りや領土問題が絶えなくなる。

＊

単純に考えてください。

「○△X」は必ずしも「○△X」ではなくなります。なぜなら、この「○△X」という文字（言葉）を読んでいるあなたと、「○△X」と書いた私は別人であり、それぞれが「○△X」について別の思いをいだくからです。

「詩・し・シ・shi」という言葉を例に取ります。

「詩・し・シ・shi」は必ずしも「詩・し・シ・shi」ではなくなります。なぜなら、この「詩・し・シ・shi」という文字（言葉）を読んでいるあなたと、「詩・し・シ・shi」と書いた私は別人であり、それぞれが「詩・し・シ・shi」について別の思いをいだくからです。

＊

たとえば、文学のジャンルとはレッテルであり看板やブランドでもあります。要するに、名前です。人が名づけるときには、名前が絶対的に不足します。誰もが、その名前を自称したり他称するからです。

そのため、あるジャンルでは新名称をつくらないかぎり、名前の争奪戦が起こります。これは人間関係の問題として立ちあらわれます。

「私が書いているのが詩なの」、「いや、俺の書いているのが詩だ」、「ちがうちがう、○さんが書いているのが本当の詩」、「あれは詩ではないって、△くんの書いているのが真正正銘の詩だよ」

詩という名前の争奪戦です。小説でもミステリーでも俳句でも現代詩でもポエムでも起こりえます。名前は縄張りや領土でもあるのです。土地は不足します。どこでも土地をめぐる争いが絶えないですね。

○○詩、△△詩、XX派、ZZ主義。

こうした事態は、詩だけでなく、愛でも美でも哲学でも真理でも正義でも悟りでも民主主義でも死でも宇宙でも同じです。不都合や不具合が生じるという意味です。広い意味での人間関係、集団間や国家間や民族間や宗教間での争いや戦争にも至ります。あっさり言いましたが、ゆゆしい問題なのです。

*

言葉の世界を言界と名づけてみましょう。言界では、言葉の数が絶対的に不足します。足りないのです。つまり限界があると言えます。「足りない」状態を人は「減っていく」と認識することがあります。これを減界と名づけましょう。

すると、言界は限界であり、減界であるということになります。言界と減界がほかの人によってつかれているかどうかはネットで検索するとわかるでしょう。こんな言葉をほかにつかっている物好きな人がいるとは思いますが、こればかりは予測不能です。

あと、言界は、幻界でもあり現界でもあるという説があり、言界＝幻界＝現界＝限界＝減界、つまりぜんぶ「げん界」だということになりそうなのですが、ここではこれ以上立ち入る余裕がありません。

*

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。

最近私は記憶力がとぼしくなって困っています。記憶という機能に限界が生じてきたもようなのです。自分の中で、言界が限界に達しつつあるのをひしひしと感じるこの頃です。

あ、もう一個ありましたね。減界って何でしたっけ？

「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる

＊

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとわかりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

＊

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないのでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですけど。「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

黒板と教科書とノートをつかってのお勉強は、たいていが「わかる」ためです。理科の実験・観察や体育や家庭科や図工なんかは、だいたい「はかる」の世界です。

保健室も「はかる」の領域という感じがしませんか。体温計、体重計、そして何と呼ぶのか知りませんが、身長や座高を測る計器が置いてあるところです。そして最後は通知表で、これが「はかる」の総決算になるのです。

はかられる気分は決していいものではありません。少なくとも私には悲しい思い出しかありません。人間が数字に還元されるのですから。

飛躍するようですが、一足す一は二というのと同じで、事物や生き物の個性を消すのが「はかる」なのです。数字になるとは、個性を消されることにほかなりません。

はかる行為が、例の殺伐とした残酷な風景と究極においてつながっていることを忘れてはならないと思います。死者〇〇名とか負傷者〇〇名という具合に。

*

体育も「はかる」の世界です。というか、「はかる」そのものが体育だという印象があります。しかも「はかる」だけではなくて、「くらべる」のです。そして「きそう」のです。嫌でした。

大学に進学して一般教養の科目として体育があると知ったときには、度肝を抜かれました。「うそー。だまされたー」という気がして、しばらく立ちなおれませんでした。私にしてみれば、まさに、はかられたのですから。

高校を卒業して嬉しかったことのベスト3に、体育とのお別れがあったからです。そう信じて疑っていなかったのです。なのに、大学にまで体育がついて来たのです。ショックでした。

それで思い出しましたが、大学の入学式のすぐあとに身体測定兼体力測定があったのです。その会場の雰囲気、すごく嫌でした。体育会系の部やサークルの連中らしき者たちが、当たり前みたいな顔をして場内をうろついているのです。そして握力や背筋力や肺活量などをはかる計器のそばで、新入生たちを物色しているのです。

ドナドナドーナ、ドーナという悲しげなメロディーが頭の中で鳴り響いていた記憶があります。売られていく家畜になったような、切ない気分になりました。

でも幸いなことに、運動能力とか体力とか腕力のたぐいには全然自信がなかった私は、見向きもされませんでした。特に握力形の数値を見たある上級生が「嘘だろ」とか何とかつぶやいたのには一瞬むかっとしましたが、すぐさまほっとしました。「僕は売れそうもない。よかった——」

＊

「はかる」をわけてみましょう。分けるのです。「はかる」と「数値化する」を分けたいのです。お金で考えてみます。値踏みという言葉がありますね。値踏みはお金という数値に置き換えることですが、お金という数字に置き換えた瞬間に、「はかる」が「わかる」に変わっているのではないのでしょうか。

値段が決まるまえに「ああでもないこうでもない」がありますが、それが「はかる」だという気がします。ある意味、優柔不断でとりとめがないのが「はかる」なのです。優柔不断でとりとめがないと言われつづけてきた私は、親しみを覚えます。

「値踏み」や「値を踏む」のこの「踏む」とは、地面の土を足の裏で押すことにほかなりません。野菜や果物のできぐあいを目をつむって押してみる。スーパーでラップにくるまれたお肉や魚をこっそりと押してみる。あれと基本的に同じです。

人が身体をつかって「おしはかっている」のです。指や手、足の裏や足の指という繊細なセンサーがついてる末端で「押す」「推す」わけです。「今年は○が優勝すると踏んだ」なんていう場合の「踏む」は「おしはかる」「はかる」ときわめて近い気がします。

走り幅跳びとか走り高跳びのスタート地点付近で足踏みみたいな仕草をする選手がいますが、あれも踏んでいるし、はかっているのでしょう。間合いとか土のぐあいとか風向きや風の強さとか自分の中の「何か」とか観衆の圧とか、そういうものをはかっているにちがいません。

結果としての数字つまり記録は後でやって来ます。「わかる」は後に来るのです。わか

るまではどきどきでしょうね。わかって喜んだりがっかりしたり.....。

足踏みという言葉とイメージが好きです。えんえんと足踏みをしている。前には進んでいない。べつに踏ん張らなくてもいい。えいえんにわからないまま。たぶん、わかることを放棄している。ふんでいるだけでいい。自分の人生みたいで親しみを覚えるのです。

言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るという話

＊

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。

こういうことをしていると、言葉を道具としてつかおうとするさいに不都合や不具合が起きるだろうと考えられます。たとえば、次のようなことが起こるでしょう。

「○△X」と言葉をつかひながら、「○△X」とは関係がなさそうであったり、むしろ反対と思われることをやっている人や状況が出てくる。

＊

難しく考えないでください。よくあることなのです。次のような人や状況に心当たりがありませんか？

「論理的、論理的」と感情的かつ支離滅裂に叫んでいる、「正義のため」と言いながら武器を使用して人びとを鎮圧している。これだけでも十分なようなものですが、もう少し例を挙げます。

「存在と無」の「無」が「存在」に見える、つまり「存在と存在」に見える。これは目が悪い可能性もあります。「無」という厳めしい漢字にびびっているとも考えられます。人それぞれです。

「見た、見た」と言っているのに見てないふしがある。これも視力の問題である可能性が高いです。「読んだ、読んだ」、「知っている、知っている」、「存じません、存じません」、「理解した」、「悟った」という言葉が言われたり、書かれたりしながら、そうではないような人がいたり、そうではない状況があるなんて、数えきれないほどありますから、知覚や認知機能の問題とは言いきれない気がします。ご自分のまわりを見てください。

＊

嘘をついていると考えるのがいちばんわかりやすいのですが、故意にAをBだと言っているのではなく、そもそもAをBだと決めたことに問題があるケースがきわめて多そうなのです。

「ネコ・猫・ねこ・neko」という言葉で考えてみましょう。これは日本語での慣習です。習わし、つまり口癖なのです。別の言語では、別の言葉、つまり口癖で呼んでいます。

「ネコ・猫・ねこ・neko」というものと、「ネコ・猫・ねこ・neko」という言葉のあいだには本来は関係がなくて、「ネコ・猫・ねこ・neko」と呼ぶことに決めたから、そうになっているだけだと言えば、おわかりになりやすいのではないのでしょうか？

＊

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。

むしろ、つぎのように言ったほうが正確かもしれません。

人は「○△X」という言葉を決めたただけなのに、口にしていううちに決めたことを忘れて、「○△Xは○△Xなんだ」と思いこむようになった。

あっさりと言いましたが、すごい失念であり錯覚です。言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るという話なのです。

「○△Xは○△Xである」のうち、前の「○△X」と後ろの「○△X」は同じではないのです。食い違っているのはざらで、前の「○△X」なんてものはじつはなかったりします。つまり言葉だけがあるのです。決めただけですから。

＊

○△Xは名詞に限りません。動詞でも形容詞でもなんでもそうなんです。「見える・見る」「知っている・知る」「考える」「きれいだ」「すばらしい」「きたない」「きもちがいい」「いいわ」「もっと」「だめよ」「そうです」「ちがいます」……。

(※このうち、「だめよ、だめだめ」が「いいわ、もっともっと」だという例がいちばん体感しやすいかと思います。こういうのは、習わしであり口癖だと考えるとわかりやすいのではないのでしょうか。言葉は口癖なのです。言葉は、ほんらい事実とか真実とか正しさとか美しさとは無縁なんです。)

目に見えるものならまだいいのですが、「読む」とか「わかる」とか「考える」とか「悟る」なんて、そういう言い回しを決めただけで、そういう行為が人にできるのか、できたとして、どうなっているのかはぜんぜんわからないままなのです。

これが「人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である」でなかったら、何と云えばいいのでしょうか？

大切なことなのでもう一度言います。言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るという話なのです。あっさりと言いましたが、とんでもない話ですよ。

ある人たちがそう決めただけですから、その人たちは自分の都合で決めたことを変えるだろうし、別の人たちは別の思いや都合で口にするだろうし、決めた人たちが死ねば、また別の人たちが別の思いや都合で口にするに決まっています。「決めた」だけですから、当然です。

これは不都合や不具合が生じるどころの問題ではないのです。広い意味での人間関係、集団間や国家間や民族間や宗教間での争いや戦争にも至ります。あっさり言いましたが、ゆゆしい問題なのです。たぶん、妄想ではなく、もうそうなっているのです。

ややこしいですか？ ごめんなさい。でも、私、難しい専門用語——たとえばネット検索をして調べないと「どう決まっているかが」わからない言葉のことです——とかつかっていませんよ。だいいち、知りませんから、つかえません。というか、「専門家」(これも決めた言葉を自称他称したものです)とやらが決めたことには興味がありません。

*

いちおう、まとめます。

「AがBだと決めた」と「AはBである」とはかなり遠い気がします。

空回りで空騒ぎする

＊

人は「AをBだと決めた」だけなのに「AがBである」と思いこむ。

こういうことをやっていると、どうなるのかを考えてみましょう。その前に、なんでこうになってしまうのかを考えてみます。

みんなでやっているうちにそう思えてきた。

これは大いにありえますね。心当たりがあります。こういうことって自分を含めて人にはよくあります。人情と言ってもいいでしょう。

考えたこともない。

それが人である証拠だと思います。それが人である原点だとも言えそうです。言えそうなのではなくて、いえ、そうなのです。

「AをBだと決めた」のを忘れた。

これも大いにありえるのではないのでしょうか。人は覚えることが多すぎて、肝心なことやどうでもいいことの見境なく、どんどん忘れるようです。これも自分の問題として考えるとわかります。わかりすぎて怖くなるくらいです。ヒトとしての、あるいは個人としての認知機能の問題とも言えそうです。記憶には限界があるのです。

＊

人は「AをBだと決めた」だけなのに「AがBである」と思いこむ。

こういうことをやっていると、どうなるのかを考えてみましょう。

Aが見たり触ったりできるものなら、まだましですが、Aが見ることも触ることもできないもの、つまり抽象的であったり、概念や観念だということになると、観念するしかなさそうです。お手上げという意味です。

どういうことかと言いますと、空回りが起きるのです。「AをBだと決める」はふつう「名づける」という形であらわれます。その結果が名前であり言葉です。

「名づける」という身振りが空回りするのです。そうなると空騒ぎが起こります。

大したことではなかったり、実体がないのに大騒ぎすることですね。「名づける」が空転する。あっさり言いましたが、とんでもない話なのです。

民主主義、正義、真理、事実、哲学、神、愛、美、本当、本当のもの、本物、偽者、フェイク……。

決めただけなのです。すったもんだが起きるのは当然です。

これは不都合や不具合が生じるどころの問題ではないのです。広い意味での人間関係、集団間や国家間や民族間や宗教間での争いや戦争にも至ります。あっさり言いましたが、ゆゆしい問題なのです。たぶん、妄想ではなく、もうそうなっているのです。

ですから、こうした事態は、私を含む人誰にとっても、対岸の火事ではなく家事であり、異常な状態ではなく常態なのです。言葉を持ってしまった人間であるかぎり、避けられない状況、つまり常況なのだと言えます。

＊

「名づける」が空回りしているとは、たとえば次のような形であらわれます。

- ・名づけられている実体がない。つまり、決めた言葉だけがある。
- ・その言葉（名詞だけでなく、動詞も形容詞もなんでもです）が、語義やイメージからほど遠い動きをする。

要するに、空騒ぎなのですが、これを「言葉のひとり歩き」と名づけたり、呼んだりする人がいます。言葉のひとり歩きなんて人ごとみたいな言い方ですが、まさに人ごとみたいに言うときにつかう口癖です。

「それはですね、〇〇という言葉がひとり歩きをしまして、私には責任が……」

このように言い訳でつかわれる言葉になっていることがきわめて多いので、「言葉のひとり歩き」というレトリック、つまり言い回しが誰かの口から出てきたときには気をつけましょう。

＊

「名づける」が空回りしているとは、たとえば次のような形であらわれます。

- ・名づけられている実体がない。つまり、決めた言葉だけがある。
- ・その言葉（名詞だけでなく、動詞も形容詞もなんでもです）が、語義やイメージからほど遠い動きをする。

「〇〇、読んだ？」「読んだよ」、「客観的事実と普遍的真実の差異は何なのだろう？」「……」、「愛と友情の違いについて考えているんだ」「すごい」、「人間としての存在および実在をまっとうするためには、本当の美しさの追求が重要だと思うの」「そ、そうだよね」、「聞いている？」「ちゃんと聞いてますよ」「ほんと？」「嘘だと言うの？」

人が言葉をつかったり会話をするのは、人間関係を円滑にするためだと考えれば、こうした状況をふつうにやり過ごせばいいのだと思います。私もそうしています。これまでもそうしてきたし、いまもそうしているし、これからもそうするでしょう。

また、難しそうな言葉や、何か意味がありそうな言い方を、目にしたり耳にすると、張りきったり、わくわくする人がいます。そういうのが苦手な人もいます。無視する人もいます。毛嫌いする人もいます。人それぞれです。

漢語系の言葉は厳めしくて「何かありげ」ですが、カタカナ語もそうです。シーニュ、アイデア、プラウダ、ゲシュタルト、エクリチュール、ディスタンス……みたいに。漢語

と同様に、こうした言葉が日本語の文章の中でつかわれると、とたんに特別な「顔」や「表情」をまとうことを忘れてはなりません。旧ソ連を旅した政治家が「プラウダ、プラウダ」とさかんに誰もが口にしてるので感動したという話があります。「ほんとう、ほんとう」「そうだ、そうだ」という意味だったらしいのです（古い例で、ごめんなさい）。

「いやよ、やめて。ぜったいに、いや」「わかった」「なんで、やめるの?」「……」

これは、まさに「その言葉（名詞だけでなく、動詞も形容詞もなんでもです）が、語義やイメージからほど遠い動きをする」、ほんの一例です。言葉の空回りから起きた空騒ぎが、大騒ぎにならないければいいですね。ところで、いまの会話ですが、国家間でも見られる状況、いや常況なのです。「政治家同士の会話みたい」とおっしゃった方に、座布団三枚進呈させていただきます。

＊

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か?」と問い、思い悩む生物である。

人は「○△X」という言葉を決めただけなのに、口にしてるうちに決めたことを忘れて、「○△Xは○△Xなんだ」と思いこむようになった。

こういうことをしていると、人は言葉の世界に迷いこむことになります。人の考える世界や宇宙は、じつは言葉の世界なのかもしれないという話なのです。

たとえば、「短い」と「長い」は反意語ではなくて、「大きくなる」と必ず（あるいは同時に）何か「小さくなる」ことがある。たとえば、「百年が過ぎた。」という「短い」言葉で「長い」時間を処理できる。

あくまでも、「たとえば」なのですが、これが言葉の世界なのであり、さらに言えば、人の世界なのです。こうした不思議な世界を実感できる本があります。

正確に言うと、「○△Xは○△Xなんだ」と思いこんでいる人が、そう思いこんでいる

自分に気づくかもしれない本なのです。

*

ルイス・キャロル作の『不思議の国のアリス』です。これは、もう読んでいただくしかありません。何種類かの翻訳がありますが、どれでもかまいません。

私は、この『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫の話が好きです。猫が笑って、その笑いだけが残るといってお話です。

猫という物つまり具象が消えて、笑いという表情つまり抽象が残る――。

ルイス・キャロルって面白い話をとてもリアルに書いた人なのです。すごい作家だと思います。こんな書き手はほかに知りません。かなりこみいったややこしいことを子ども向けのお話という形でリアルに書ける人なのですから。

『不思議の国のアリス』とその続編の『鏡の国のアリス』には、難しい言葉、つまり辞書や哲学事典で調べるとか、ネット検索をしなければ、どういう意味なのか（どう決められたのか）がわからない言葉は、ぜんぜんつかわれていません。

それなのに、哲学者や文学研究者や論理学者と呼ばれる人たちが、たぶん一生懸命に読んで、難しい言葉をつかってああでもないこうでもない議論してきたのです。

それはどうでもいいことなのですが、この本を読みたい、またはもう一度読みたいという気持ちに結びつけば、うれしいです。あと、この本には駄洒落（言葉遊びなんて気取った言い方はしません）がたくさんでてきます。個人的にはそこがいちばん好きです。言葉が人の決めたものであると体感できます。

「はかる」と「わかる」のあいだで揺れる

＊

苦手なものが多い私ですが、ほかの人たちに比べて極端に乏しいのが、投げる力です。学校時代には、それで苦勞もしたし嫌な思いを数えきれないほどしていました。

投げる力をはかるのには、ハンドボールやソフトボールを投げさせられますよね。私の場合には、投げた時の距離が半端じゃなく短いのです。

それを知らない先生は、ずかずか寄ってきて「おい、ふざけんなよ」なんて言われたことがありました。肩にきつと障がいがあるのだと思います。でも、日常生活には支障がないので気にはなりませんけど。

必然的に、ソフトボールも、野球も、ドッジボールも駄目ということになります。中学に入ってバレーボールとサッカーをやらされたときには、何とかなりましたけど、幼いころから球技全般に嫌悪感をいっていました。

好きだったのは走るくらいでしょうか。それも短距離だけです。持久力がないので長距離はまるっきり駄目でした。高校の「マラソン大会」のときには遅れ気味の第二反抗期だったので、コースの後半は堂々と歩きとおしました。もちろん、「どんけつ」でした。内心、誇らしく思ったのを覚えています。

＊

とにかく、スポーツは「はかる」の世界ですね。記録は「はかる」ものですから当然です。私は趣味として何かのスポーツをすることがありません。スポーツ観戦は積極的にはしません。テレビでたまに見るくらいです。

実際に試合や競技が行われている場に出向くことはありません。プロ野球、サッカー、ラグビーのスタジアムやフィールドにも行った経験が一度もないくらい、スポーツとは縁がないのです。

高校三年の秋に、市内対抗の体育大会が催された多目的競技会場に、嫌々ながら応援のために連れて行かれたのが最後です。

それにもかかわらず、スポーツ関係のノンフィクションを読むのが大好きなのです。とくに山際淳司と沢木耕太郎が書いたスポーツものは、ある時期までほとんど目を通していました。ルールを知らない競技のものでもおもしろいというか、読んでいて快いので読みました。

いま挙げた二人の書き手の文章が好きだったということもあります。書く側としてのスタンスのとり方に共感を覚えました。スポーツはやらないけどスポーツについて書かれた文章を読むという私の癖は、小説や詩は読まないが文芸批評は読むとか、映画は観ないのに映画評を好んで読むという、もう一つの癖に似ている気がします。

知らないものや見たことがないものについて書かれた文章ほど、私をわくわくさせ惹きつけるものはないようです。これは、たぶん、私が「わかる」を放棄しているからだと思います。目の前には言葉とその身振りしかないのですから。足踏みをしているだけで、あったまります。

＊

「読む」という行為は、「わかる」だけでなく「はかる」とも近いようにも、また「わかる」と「はかる」とが「読む」において重なっているようにも思われます。

個人的なイメージですが、「読む」において、「わかる」とは「分ける」、つまり分析して「決めつける」ことです。すぱっと切って分けるのです。知的な行為だとも言えるでしょう。

一方の「はかる」は、思いを推しはかり「見当をつける」のです。スパッと割り切るわけではないでしょうね。共感や「思いやる」に近い心の持ち方ではないかと思われます。

この両方のあいだで揺れるのが「読む」だという気がします。はかってみると、わかる。でも、またわからなくなるから、はかる。その繰り返しの繰り返しです。

さらに言うなら、「スポーツをする」にも「スポーツを見る・観る」においても、「わかる」と「はかる」が共に重要な役割を果たしている気がします。「決めつける」と「見当をつける」のあいだで揺れながら、人の美しい動きをながめるのです。

両者のあいだで揺れるのですから、当然のことながら、「わかる」と「はかる」の境が不明になります。じっさいは、そうなんでしょうね。はかってみると、わかる。でも、またわからなくなるから、はかる。その繰り返しの繰り返しです。

「スポーツをする」には「わかる」と「はかる」のどちらに傾いても、身体を活かすことはできず、いいプレイはできないと想像します。また「スポーツを見る・観る」にも、両方の要素がないと、見ていながら多くのものを取り逃がす気がします。

＊

こっちとあっち、あっちとこっち。どちらに在るかで言い方が変わります。

「こっち」から「あっち」にうつるときに、その「あいだ」と「ころあい」を目でみつもり、同時に思いでおしはかります。間合いを「はかる」のです。そして、覚悟を決めてうつってみる。すると、こっちがあっち、あっちがこっちになる。これが「わかる」なのかもしれません。

でも、とたんに「わからなくなる」のです。どっちがどっち？ で、また「はかる」ことになります。そうやって、同じ動作を繰り返すのです。

「はかる」がこっち、「わかる」があっち。「わかる」がこっち、「はかる」が「あっち」。「はかる」と「わかる」のあいだで揺れる。そういうことなのかもしれません。

人が一時的に言葉になる

＊

人は「○△X」という言葉を耳にしたり目にしたとき、「○△Xは○△Xである」と思いこまないかぎり、その言葉を読んだり聞いたりできないのではないのでしょうか。

つまり、一時的に「○△Xは○△Xである」と信じるしか、その言葉と付きあえないのです。さらに言えば、人にとって「○△X」という言葉と付きあうとは、その言葉になりきることもかもしれないとさえ思えます。

おそらく「○△Xは○△Xである」と信じて、「○△X」になりきるのが、人として言葉の世界にあることなのでしょう。

＊

たとえば、「犬・いぬ」という言葉を目にしたり耳にしたとき、その言葉を疑ったり退けては、入ってこないということです。「犬・いぬ」という言葉が入ってきた瞬間、人はその言葉になる気がします。正確に言うと「犬・いぬ」ではなく、「犬・いぬ」という言葉とイメージです。

「犬が吠える」という言葉を読んだとき、人はその言葉の意味を自分なりに取り、自分なりのイメージをいください。その瞬間、人はその言葉になります。どんな犬か、どんな吠え方かは人によって違います。あくまでも個人的なイメージです。普遍的なイメージではありません。

「犬が泳ぐ」「犬が嘔みつく」でも同じでしょう。

「犬が空を飛ぶ」はどうでしょう？ 人はいったん、その様子を頭に浮かべるでしょう。そして、そんなことはないとか、かわいいなあとか、おもしろいとか、くだらないとか思うでしょう。

「犬が空を飛ぶ」という様子を頭に浮かべた時点で、人はその言葉（文）を一時的に信じていると言えそうな気がします。意味づけや判断や印象は後にくるという意味です。

*

否定や非難も同じく後に来ます。「忘れる」も後に来ます。「思い出す」も後に来ます。「思い出す」は意識的に思い出す場合も、無意識に思い出す場合もあります。

馬鹿げた話だと思ったのに、それが忘れられなかったり、忘れたはずなのに、いつかふいに頭に浮かぶこともあるでしょう。個人的には、そういうことが数えきれないほどありました。

荒唐無稽でありえない映像が、頭に浮かぶなんてしょっちゅうあります。灰色のクジラが真っ青な空を飛んでいる。猿が箸を器用につかってスキヤキを食べている。人間の顔をした猫たちがオーケストラをなして演奏している……。

アニメとか漫画とか絵本で見たのか、そういうものを見て勝手に連想したのか、夢で見たのか、夢うつつで思いえがいたのか、その出所が不明なのに、妙にリアルに絵として浮かぶのです。

*

思う、想像する、考える、空想する、思いえがく、とつぜん思い出す。こういったことは、頭か心か脳か意識か知りませんが、とにかく自分の中で起きている気がします。

これを人につたえる、しかも詳細に正確につたえるなんて、どうてい無理な気がします。文章で書いても、それは文字です。話しても、それは音声です。絵で描いても、それは絵の具や色鉛筆なんかでなぞった染みです。

置き換えているのですから、思いの中の絵とは別物です。「つたえる」とは置き換えであると言えそうです。人が思っているほど「つたえる」ということはできそうもないと

という意味です。

＊

「つたえる」という言葉に期待する人間が悪いとか、意味を決めずに「つたえる」という言葉を決めてしまった人間の自業自得だとは言いませんが、裏切られた思いはします。もどかしいし悔しくもあります。

私が「つたえる」という言葉を「つたえる」というふうを受けとり、「つたえる」は「つたえる」とあると思いき、この「つたえる」という言葉を信じてしまったから、残念だと思っていることは確かなようです。

＊

人は「○△X」という言葉を耳にしたり目にしたとき、「○△Xは○△Xである」と思いきまないうち、その言葉を読んだり聞いたりできないのではないのでしょうか。

つまり、一時的に「○△Xは○△Xである」と信じるしか、その言葉と付きあえないのです。さらに言えば、人にとって「○△X」という言葉と付きあうとは、その言葉になりきることかもしれないとさえ思えます。

おそらく「○△Xは○△Xである」と信じて、「○△X」になりきるのが、人として言葉の世界にあることなのでしょう。

＊

似たことは、話し言葉（音声）や書き言葉（文字）だけでなく、音楽、映像、絵画、彫刻、演劇、ダンス、スポーツでも、起きている気がします。

人のつくったものに人が一時的になるというのは、音楽がいちばんわかりやすいと思います。あと映画や動画もイメージしやすいのではないのでしょうか。具体的にいうと、音や歌詞や旋律や映像や動作や演技や風景になりきってしまうのです。

なりきらずには楽しめないからです。一時的に忘我の境地に至ります。カラオケなんてわかりやすい気がします。

人は表象をつくり、表象に擬態する。つまり、表象を信じ、ひいては表象になりきっている。そんな気がしてなりません。

(「表象」を言葉、記号、象徴に置き換えていただいてもいいでしょう。)

人は自分がつくった言葉の世界に生きている。自分がつくった表象の世界に生きている。そんな気がします。

シルエット

＊

夜は寂しい。よるべないというか、何かあったときに頼る人がいない、泣き叫んでも誰も来ないと想像すると寂しさを通りこして怖い。

冬の日暮れの真っ暗な山中を車で走ったことがある。私は助手席にいて峠を越したのだが、怖いし寂しかったのを覚えている。標高の高い田舎の山の中だから、ときどき雲のあいだから見える月と星のほかには光がほとんどない。

目の前に見えるのは乗っている車のヘッドライトに照らされた数メートル先の道路だけ。街灯はまずない。遠くにある集落らしきあたりから、たまにぼつぼつと光の点が散らばって見えるくらいだった。

きらきら輝く自動販売機が道端にいきなりあらわれたり、ぼつんとした一軒家から漏れる光がふいに見えるとほっとする。そうした光は決まって長方形だったり正方形だったりする。目を凝らすと四角形の枠の中にいくつかの光源が見える。

たまに丸い電灯もあるが、闇に浮かぶ光はだいたい四角形をしているか点だった。星は四角には感じない。欠けた月にも角っぽさを感じることはない。自然界には四角く輝くものはほとんどない気がする。人間は不自然であり反自然でもあると考えると納得がいく。

＊

四角や直線は自然界にはあまりないのかもしれない。逆にいうと、四角や直線があれば、そこに人がいるという印になる。最近、夜になるとそんなことを考えている。

うちの二階の窓からは数百メートル離れたところにあるコンビニが見える。

カーテンを開けると、暗い中に煌々としたガラス張りの店舗が遠く浮かんでいる。闇の中でそのまばゆさは異様といえば異様であり、もちろん四角い。横に長い四角形のなかに、さまざまな色が見える。駐車場でときおり長細い車が動くのがシルエットになって動く。

吸い寄せられるように人が入っていき、何かを手にして出ていくのをながめていると、夜のコンビニに入る人たちの気持ちがこちらにうつってくるようで、孤独感と同時に安堵と満足を覚える。

利用者には一人暮らしの人もあるだろう。旅や移動の途中に寄る人もいるにちがいない。緊急事態で駆け込む人がたまにいと聞く。

ああ、あそこに行けば人がいて、四角い棚に収められ、四角い容器に入った食べ物や飲み物がいっぱい並んでいる。長方形の雑誌や本だって並んでいる。深夜に自由に出入りできるのはコンビニくらいではないだろうか。

真っ暗ななかに明るい光を放って浮かぶ四角形。自然のなかにある不自然は人をほっとさせる。人自身が不自然だからにちがいない。

夜はもちろん昼間でも私が外に出ることはめったにないのだが、夜に動いている「生の」人間が見えるのは窓からだけなので、眠れぬ夜によく二階に上がる。

距離があってコンビニから出てくる人の顔まではわからないものの、その足取りは心なしか軽く見える。シルエットとして浮かぶ人の姿は四角くはない。よかったね、なんてその影につぶやいて階下の寝室にいくとよく眠れる。

痛みをつたえる名文

＊

自分の感じる痛みをお医者さんや他人につたえるときに、どうしますか？ 錐で刺すような頭痛、分厚い布団で上から締めつけられているみたいな胸の苦しさ、針の上で寝ているような全身の痛み——みたいに、「〇〇のような」とか「〇〇みたいに」と比喩をもちいるのが一つの方法だと思います。

ちくちく、ちくりちくり、ずきずき、がんがん痛む、ひりひり、ずきんずきん——のように擬態語をつかうこともできますね。日本語はこういう擬態語や擬声語が豊かで助かります。かなり正確に痛みを伝えられそうな気がします。たとえば英語では、そんなに豊富ではないようです。

ちくちく、じんじん、きりきり痛むなんて、口に出してそう言うだけでそうした痛みが感じられるようで眉をしかめてしまう自分がいます。暗示にかかりやすいのです。

＊

痛みを表現するのがもっとも得意な手段は何でしょう？ 絵や写真、そして映画や動画の映像のように視覚に訴えるとか、話し言葉や書き言葉をもちいる、あるいは音楽や音といった方法が考えられます。

映像なら、痛くさせている原因となる物や状況と痛がっている人とその様子を描いたり映したりするのでしょうか。苦痛に歪む顔とか、ナイフが皮膚に刺さる場面とか、人がナイフを振りかざす姿のナイフだけが大写しにされるショットが考えられますし、あと血の飛び散った壁だけが写しだされるとか、漫画だと「ぎゃあああ!!!」なんて吹き出しだけのコマを、じっさいに見た覚えがあります。

見ているとこっちまで同じ顔つきになったり、瞬間的に写っていない部分が見えたりして、痛さがつたわってくるような気がします。敏感な人は気絶するかもしれません。

映画で見るこうしたシーンやショットの特徴は、顔だけとか、目だけとか、口だけとか、身体の一部だけがクローズアップされることです。全部は見せない。ここがポイントです。映画でも小説でもあります。たしか修辞学的な用語もあったはずですが、専門用語は苦手なで忘れてしまったので、手持ちの言葉と言い回しで説明を続けます。

要するに、ほのめかすのです。一部分だけを映像や文章で見せて、全体像やその状況を見る者や読む者の想像力にまかせるわけです。なぜこうするかというと、そのほうがずっと怖いし痛く感じるからです。性的な表現と同じです。ちょっとだけのほうが数段エロいですね。この「ちょっとだけ」は痛みや苦しみにもきわめて効果的なのです。

こうしたテクニックというか塩梅をうまくつかえる作り手が良質の作品を制作できるのでしょうね。もろに出しては興ざめなのです。ま、最初は食い入るように見たり読むでしょうが、すぐに飽きるという意味です。

映画でこの種のテクニックがうまいのはアルフレッド・ヒッチコックではないでしょうか。シーンはシンプルなのに痛いし怖いしぞくぞくわくわくします。しかも飽きません。何度も鑑賞できます。

＊

痛みや苦しみを見せるための映画といえば、ホラー映画やスプラッター映画でしょう。私はこういうジャンルがきよくたんに苦手なでほとんど見たことがないので、残念ながらここでは扱えません。

ただし、スティーヴン・キングの小説や、それが原作である映画は好きです。キングの小説は一時期、新刊が出るたびに買っていたので、いまも段ボール箱にいっぱいあります。あと、ホラーやスプラッターの要素がある小説だと、村上龍と江戸川乱歩を挙げないわけにはいきません。

スティーヴン・キングは状況や設定で読ませます。痛みというよりも広義の苦しみや恐怖が描かれている作品で傑作だと思うのは、長編では『ミザリー』、中編の『超高層ビルの恐怖』、短編だと『第四解剖室』です。

村上龍は身体に訴えるパワフルな描写で読者を圧倒します。痛みと苦しみに焦点を当ててなら、お薦めは『コインロッカー・ベイビーズ』、『イビサ』、『トパーズ』（短編集）、『インザ・ミソスープ』です。

江戸川乱歩は奇想と何げない文章で読者を悪夢にさそいます。肩に力が入っていないようで凝っているとか、巧まないようでじつは巧んでいる文体が特徴です。痛いよりも切なくて苦しいが得意だと思います。『鏡地獄』『踊る一寸法師』『芋虫』『人間椅子』といった短編が読みやすいです。

＊

言葉の喚起する痛みのすごさを実感するには、日本語を母語とする人にはやはり擬態語とその関連語がいちばんではないでしょうか。そのすごさを実感するためにお薦めしたいのが、辞書の説明と例文です。

ちくちく、ちくりちくり、ずきずき、ずきんずきん、しくしく、ひりひり、がんがん、しみる、ひりつく、差しこむ、うずく——で試してみてください。例を挙げます。

- ・ 錐をもみ込まれるように鋭い痛みが持続するさま。「胃がきりきりする」【広辞苑より】
- ・ 傷口などが脈打つように絶えず痛むさま。「虫歯がずきずき（と）痛む」「頭がずきずきする」【デジタル大辞泉より】

名文だと思います（きりきりの項で「錐をもみ込まれるように」とあったのには笑いそうになりましたが）。シンプルです。読んで痛くなります。飽きません。声に出して読みたい名文ではありますが、パニックというか突然の悪夢を誘発する恐れがあるので、暗唱はお薦めできません。

言葉の世界で生きる

＊

人は世界を言葉というフィルターを通して見ていて、世界そのものとは出会っていない。こういう考え方があります。世界がどうだこうだと考えたがる人たちのあいだではよく見られるイメージです。

私はぼっちで、しかも隅っこ暮らしですが、そういう人たちのひとりなのかもしれません。連帯する気持ちはありません。なにしろ、自治会にも入っていないし、同窓会にも出席したことのない人間なのです。

ですから、人名も人の顔も覚えるのが苦手で、メジャーな界限のことは知りません。強いて言えば、いまはnoteにいるピン芸人という立ち位置でしょうか。

＊

そんなわけで、「人は世界を言葉というフィルターを通して見ていて、世界そのものとは出会っていない」というイメージを自分なりに勝手にここでいじらせていただきます。要するに、誰々が何と言ったかを紹介できないという意味です。固有名詞が大の苦手なのです。

自分でああでもないこうでもないとやってるほうが楽しくないですか？

＊

気配という言葉とイメージが好きなので、これをつかって話をしてみます。

何ものかとの出会っていないながら、すれちがってしまっている。これが私のイメージしている気配というものです。出会っているのにすれ違っているなんて、テレビドラマみたいですけど、ちょっと違う気もします。

言葉というものを持ってしまったために、人は世界や世界にあるいろいろなものと出会っているが、すれ違っているために、気配を感じるしかないという情けない話なのです。

じつは、いま、ずるをしました。

いま「世界」という言葉をつかいましたよね。あと「世界にあるいろいろなもの」とも言いました。これって変じゃないですか？ すれ違って気配でしか感じられないものを「世界」とか「世界にあるいろいろなもの」なんて言ったのですから、これが「ずる」ではなくて何なのでしょう？

出会い損ねているものを、まるで出会って知っているような口調じゃありませんか。「ずる」どころか「詐欺」じゃないでしょうか？ 自分でつつこみを入れていますが、これは誰もツッコんでくれないからなのです。

ピン芸人の悲しさです。

＊

ここでまたずるをさせていただきます。今度のずるはレトリックと言います。レトリックとは言葉の綾とも言いますが、要するに言葉をつかって相手を言いくるめたり、だましたり、思わせぶりをしたいときにつかうテクニックとを考えてください。

テクニックとレトリックは似ていますよね。トリックも似ていますね。トリックのほうが似ているので、これからはレトリックをトリックと言います。

＊

遠隔操作というトリックをつかいます。

言葉というフィルターが壁みたいになっているので、向こうが見えないし、触れないし、音も聞こえないし、匂いもしないのです。

遠隔治療とか遠隔医療を思いうかべてください。壁があれば、一メートル離れていよ

うと、五万メートル離れていようと、治療や診断や手術が可能なのが、遠隔医療です。

それと同じとは言いませんが、似たことをやっているのが、言葉なのです。遠隔医療と同じく有効性があります。これだけは言うておきます。月に仲間を送りこんだり、地球の温度を上げるほどの有効性はあるという意味です。

遠隔操作は、Aの代わりにBをもちいるという錯覚を利用した方法です。言葉のことです。この錯覚を利用しないかぎり、遠隔医療も、対面による医療もできません。また、思弁哲学であれ、計器をもちいた実験心理学であれ、錯覚について考えたり、検証することもできません。

この錯覚（平たく言えば、置きかえでありすり替えです、そのものを扱えないので、こうするのです）を、好みで知覚や幻覚と決めても同じことです。錯覚をもちいないと錯覚を思考できないことには変わりはありません。最終的には言葉で処理するからです。

「猫・ネコ・ねこ・neko」という言葉は、猫そのものではありませんね。でも、猫そのものが目の前にいなくても、「猫・ネコ・ねこ・neko」という言葉を、猫そのものの代理としてつかって何とか猫の話をしているのが、人間なのです。

猫がいないところで、「猫・ネコ・ねこ・neko」という言葉をつかって二人の人が会話をしている場面を想像してみてください。その二人の目の前に猫はいません。でも、猫の話をして盛り上がっているのです。

猫の気配を感じているからだとも言えます。猫に出会うことなく、つまり猫とすれ違っても、「猫・ネコ・ねこ・neko」という言葉で猫を語っている気持ちになれる。これが言葉の世界なのです。

＊

ところで、いまお話しした二人ですが、そんな人はいません。私のでっちあげたのですから。でも、なんかいるような気がしませんでした？ これも言葉の世界なんです。実体とか中身とか内容なんてなくても成立するのが、言葉の世界の特徴なのです。

不思議ですよ。手品か詐欺みたいです。たぶん詐欺です。

〇〇と書かれていれば、〇〇だと思い受け入れる。これが「読む」です（否定や反発や無視はあくまでも後に来ます）。〇〇が〇〇だというのは、人が決めたことであり、〇〇は人がつくった言葉なのに、です。

とても大切なことを言います。人はふだんは「〇〇は何か」なんて考えずに、〇〇と付きあっています。無根拠に〇〇があるだけなのです。だから、詐欺に遭います。「〇〇は何か」と考えれば詐欺に遭わないという意味ではありません。考えても遭います。

*

人は世界を言葉というフィルターを通して見ていて、世界そのものとは出会っていない。

これは誰が語っても騙り、つまり詐欺になります。かたるに落ちるとはこのことです。

内容なんて無い様な話でした。じっさい、内容なんて無いよーだったのです。レトリック、いやトリックだけのお話でした。深くお考えにならないでくださいね。あはは、でけっこうです（話がすべれば、あははもありませんよね）。なにしろピン芸人の小話ですから。

おそまつさまでした。

Mの世界で生きる

＊

「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」と何度も訴える。いっこうに死にそうな心配がないので
す。「いいの？ わたし死にそうなの」そもそも生きてないのに訴えるのです。生きて
いないものが死ぬるわけがありません。

でも人情として、そう何度も言われるとついつい耳を傾けてしまいます。なにしろ、死
にそうだと言っているのです。放っておけるわけがありません。これが人です。「死にそ
う」だと言われれば、いちおう耳を貸すのが人です。さもないと人にならずということ
になります。

生きていないのに、死にそうだと訴える。これが言葉です。「死ぬ死ぬ、わたし死にそ
う」と何度も言う。それについ耳を傾けてしまう。これがMの世界です。

文字どおりに取るのではなく、そういう状況や場面（動き）を思いえがいてみてくだ
さい。寸劇とかコントだと思っていただくとわかりやすいかもしれません。プレイ、つ
まり演技、遊戯、競技です。

かまってちゃんの相手をするのは面倒くさいですよ。めちゃくちゃ面倒くさい。ま
まならないし、もどかしくもあります。こうした状況は不条理でもあると言えます。

生きていないのに死に真似をしようとしているのです。死んだ振りもします。身振り
が空回りしているのです。振りだけがある。『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ
猫の笑いと同じです。笑いだけが残っている。

＊

＊Mの世界：

基本は、教育と演技（演劇・振りをすること）と遊戯。要するに、プレイ。

Mはどんな人？：

教育者（自分が気持ち良くなるためのストーリーと方法を相手に教える教師）。しつこい、根気強い。かまってちゃん。自己中だけど、快感を得るためなら少々のは我慢する。言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。主導権は自分が握る。要するに、めんどくさい。最も重要なポイントは、Mはじつは「ご主人」であること。

Mの相手には、どんな人物が適するのか？：

従順。元気で健康体であることが望まれる。Mのお願いや注文（実は命令と指示）に根気よく従う良き生徒。要するに、Mの奴隷。必然的にMの協力者や「共犯者」に仕立てあげられてしまう。なお、Mの相手をMがするという状況は珍しくない。

Mの相手に最も向かないのは？：

S。

*

Mの世界を単純化すると、いわゆるSMプレイの世界ですが、これは人の言語活動の比喩ではないかという気がします。激似なのです。言葉がご主人であるのは言うまでもありません。人は下僕であり奴隷にしかなりえません。

なにしろ、相手は生きてもいないのに死ぬ真似をし続けているのです。私たちは生きているかぎり、このプレイに付きあわなければなりません。このプレイをやめるのは人をやめるのに等しいからです。人の世界は、言葉の世界。言葉の世界はMの世界というわけです。

ややこしいですね。私もそう思います。わかりやすい例を挙げましょう。

たとえば、「真摯に」とか「スピード感をもって」と繰り返されているうちに、そうではないらしいと気づきはじめたという状況があります。これは「わかった」とか「知っ

ている」でも、そうなのではないかと想像できます。

要するに、「やってる感」だけ。振りだけ。振りの空回りです。

それだけにとどまらず、「カフカ」とか「カフカを読んだ」とか「感動した」とか「精緻に読む」なんかでも同じことが起きているようです。「まさか、こんな分野でもか？」ですよ。

まだあります。「神秘」という言葉が出てくる文章やお話でも同じです。ふつう「神秘」と書かれていれば「神秘」について書いてあると思うのが人情ではありませんか。でも、よく読むと「神秘」とか「神秘的」については何も書かれていないのです。「神秘」という言葉が空回りしているからです。

「真理」でも同じです。「真理」を「真理」と決めただけなのに、つまり「真理」という言葉をつくっただけなのに、「真理」と書かれていれば「真理」だと思いきわわけです。各人が勝手に、です。

「真理と名づけて決めた」が空回りしているという意味です。空回りとは、大したことではなかったり、実体がないのに大騒ぎすることですね。「名づける」が空転する。あっさり言いましたが、とんでもない話なのです。

＊

駄目押しで言いますが、したがって、たとえば「論理」「可視化」という言葉がたくさん書かれていても、論理や可視化について書いてあるとはかぎりません。むしろ書いてないほうが多い気がします。読むとはキャベツやレタスの葉をはがすような作業なのですが、読んでいる最中には気づきません。

要するに、「やってる感」だけ。振りだけ。振りの空回りです。

これは、言葉という「代替りのもの」をもちいての遠隔操作や代理ゲームをしているからです。言葉をもちいるとは、足の痒いところを長靴の上から搔いているようなものだともイメージするとわかりやすいかもしれません。

搔いても、じつは搔いていないのです。書いても、じつは書いていないのです。同様に、かかれても、じつはかかれていないのです。「やってる感」だけ。振りだけ。振りの空回り。

言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見ても言えます。だから、話し方、書き方、辞書、生き方、人との付き合い方、「〇〇とは何か」、ビジネス、投資、哲学、宗教、心理学関連の本がコンスタントに売れるのです。

読んでためになるかどうかはわかりません。ところで、あなたは、上に並べたような本をこれまでに何冊買いましたか？ 答えは得られましたか？

もし、答えが得られないとすれば、人の決めた言葉が空回りしているからにほかなりません（キャベツやレタスの葉をはがしているのです）。この言葉とは、名詞だけでなく動詞でも形容詞でも同じです。言葉の集まりである、センテンスでも文章でも一冊の本でも同じです。

＊

言葉と付きあうとは、この空回りと付き合い、この空回りを身をもって生きることなのです。「身をもって」と書いたのは、生きた人がする身振りだからです。でも、相手である言葉は生きてないのです。それなのに、人はその声に耳を傾け、その身振りに見入り、その存在を受け入れてしまいます。

「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」「いいの？ わたし死にそうなの」にえんえんと付きあうことになります。いまの私がそうです。いまのあなたがそうです。人であるかぎり例外はありません。

文字どおりに取るのではなく、そういう状況や場面（動き）を思いえがいてみてください。寸劇とかコントだと思っていただくとわかりやすいかもしれません。プレイ、つまり演技、遊戯、競技です。

＊

言葉と付きあうとは、具体と抽象のあいだで綱渡りをする事です。言葉は音声であり空気のふるえでありインクの染みであり画素の集まりであるというのが具体です。声と文字と言い換えてもかまいません。一方、言葉の意味、辞書に書かれている語義、各人のいづくイメージが、抽象です。

この具体と抽象のあいだでゆれつつある自分をつねに意識し、けっきょくは抽象でしかありえない限界を承知しつつ、周到に抽象を回避しようとする身振りを言葉で演じた書き手があります。その言葉の身振りは、じつにM的なのです。

どんな身振りかという、「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」と何度も訴える。いっこうに死にそうな心配がないのにです。「いいの？ わたし死にそうなの」そもそも生きてないのに訴えるのです。そうです、Mを演じるのです。

MにはMを、です。なるほどと感心する戦略です。でも、書き手としてこのプレイ（遊戯・競技・演技）をするには、すごく忍耐が要ります。読むほうもすごく忍耐を必要とします。だから、あまり読まれません。

この「MにはMを」の文章は、読みにくいです。読む行為がキャベツやレタスの葉をはがすのに似ているとふつうは気づきませんが、この文章ではダイレクトに感じられます。

とはいうものの、「MにはMを」を演じても演じなくても、Mの世界で人は勝てないのです。書き手も読み手も勝てません。言葉のひとり勝ちの世界なのです。

「MにはMを」の文章の書き手は、それを承知で「MにはMを」という戦略をとりあえず選んでいる点が、決定的に重要です。

*

でも、そんなMの世界を演じている、「MにはMを」の文章にも読み人がいます。なにしろ、その書き手は学術的に輝かしい経歴の持ち主でもあるのです。いまでこそ、そうなのですが、かつて最高学府の教員であったために、その人の文章を読まずにはいられない人がたくさんいました。ここにもひとりいます。授業を取っていたのです。

その「MにはMを」の名人の名前が蓮實重彦だと書かなくても書いても、「MにはMを」の話はできます。また、たとえば、ジル・ドゥルーズという固有名詞が書かれていなくても、ジル・ドゥルーズの言葉の身振りが日本語として演じられている文章がある一方で、ジル・ドゥルーズという固有名詞に満ちた文章に、ジル・ドゥルーズの言葉の身振りに逆らっているとしか思えない抽象が書かれているなんてこともざらにあります。

人それぞれ、文章いろいろ、です。こういうのは、いい悪いの問題ではありません。検証などできない問題であることは確かなようです。

ところで、あなたはキャベツやレタスの葉をはがすのはお好きですか？

漢字の顔と表情

＊

漢字には感字の側面があるように思います。ひらがなやカタカナを見ると、それが形であることを忘れて、音に直して自分の中に入れていく気がすることがあります。

漢字はその形がダイレクトに目に入ります。暴力的に入ってくると感じることもさへあります。

痛い、いたい、イタイ、イタイ

並べてみると「痛い」がいちばん痛いです。イタイが目について痛いのはイタイイタイ病という言葉があるからかもしれません。ところで、「痛々しい」というと「かわいそう」という意味になるのは興味深いです。心が痛むということですね。

＊

五感が響き合う、つまり五感を別個のものとは感じないというのは、誰もが何かの形で日々経験しているのではないのでしょうか。べつに超常現象とか神秘体験などではありません。そもそもヒトにとって五感は独立したものではないはずなのです。

たとえば、テレビで手術の場面を見て痛いと感じれば、それは視覚や聴覚（メスが皮膚を切り裂く音、ジーッという電気メスの音、手術室の扉閉まる音……）によって痛覚にスイッチが入ったのかもしれませんが。同じ場面を見た別の人は、強い耳鳴りに襲われるかもしれません。口に酸っぱいものを感じて吐き気を覚える人もいるでしょう。視覚的なフラッシュバックを経験する人がいてもおかしくはない気がします。病院独特の匂いが急に嗅覚をはじめ聴覚や視覚や触覚や味覚を刺激することも考えられます。

＊

上の文章では、漢字をやや多めにしてあります。読むというよりも、目を細めて漢字だけの字面を見ても、なんだか厳めしいし痛い感じがしませんか？

＊

言葉で、痛くなることがある。きりきりしたり、ずきずきしたり、ちくちくすることがある。気持ちよくなることもある。せつなくなって涙がこぼれることがある。色が見えることがある。苦しくなることがある。においを感じることもある。むずむずしたり、ひりひりすることがある。お腹が鳴ることがある。誰かの声がするような気持ちになることがある。背中を撫でられたような気がする。足もとをすくわれたような感覚に陥ったことがある。体がほてってぼかぼかしてくることがある。

＊

今度の上の文章では漢字が少なめなのですが、とくに「きりきりしたり、ずきずきしたり、ちくちくする」の箇所を声に出して読むと、痛みを思いだしてたまらない気持ちになります。ダイレクトに痛みが目に飛びこんでくる感じはしません。全体的にひらがなが多いので、やさしくやわらかい感じがしませんか？

＊

漢字が感字であるのは、「絵」だからという気がします。絵は有無を言わずにざり入ってきます。どこに、身体です。

腹痛、胃痛、歯痛、頭痛、腰痛、胸痛——痛む箇所が一目瞭然です。
 疼痛、激痛、劇痛、鈍痛——どんなふう痛いかがよくわかります。
 苦痛、心痛、沈痛、悲痛、哀痛——見ただけで心が苦しくなってきました。
 鎮痛、鎮痛剤、緩和ケア——見ていると痛みがおさまるような気持ちになります。
 痛快、痛切、痛飲、痛烈——程度が「いたく」つまり「激しく」迫ってきます。

漢字は絵であり顔でもあると思います。その字面に表情を感じるのです。顔が痛いと言っているのです。

＊

人は痛みから逃れられません。私はこれまでにいろいろな病気になり、いまもかかえ、さまざまな痛みと苦しみを経験してきました。これからも、痛みと付きあって生きなければなりません。

やはりすぎるのはお医者さんとお薬です。もちろん、看護師さんや薬剤師さん療法士さんを忘れてはなりません。入院をすると、いかに多くのスタッフにささえられているかがわかります。

医方、漢方、和方、医学、医術、蘭学、独逸医学、現代医療、現代医学、東洋医学、西洋医学——。医学や医療ではじつに多くの漢字がつかわれています。カタカタの専門用語も多いですね。

言葉が「外」から入ってきたのと同様に、古来から医学と医療ではさまざまな国々や地域の技術が導入されてきたのでしょう。

杉田玄白と前野良沢などが並々ならぬ苦勞をして『ターヘル・アナトミア』を翻訳したという話を思い出します。その成果が『解体新書』ですね。言葉と医学・医療は密接に結びついています。

＊

「どこが痛みますか？」「どんなふうに痛みますか？」

お医者さんが問診で尋ねる言葉です。私たちはそれに対して、体の部位と、ずきずきとかきりきりといった言い回しで答えます。いまではお医者さんはパソコンでカルテを書いています。つい遠慮して、画面にはあまり目をやらないようにしているのですが、ちらりと見るとそこには漢字とカタカナがあります。

数字を忘れていました。数字も文字で、顔と表情があります。ある検査項目の数字が、ある患者にとっては痛さや苦しみの印となるという意味です。私にも心当たりがあります。数字に一喜一憂するわけです。

かつてうちのかかりつけだったお医者さんは、外国語でカルテを書いていたらしい

ました。筆記体でした。女性で、数年前に百歳ちかい高齢で亡くなったのですが、あのカルテは、英語だったのかドイツ語だったのか。字面が思い出せません。目に浮かぶのは先生のやさしい顔と表情だけなのです。

ざっくりと目指す

＊

あなたは詩を見たことがありますか？
あなたは詩を読んだことがありますか？
あなたは詩に触ったことがありますか？

上の三行ですが、詩みたいではありませんか？　じつは詩なんです。そんなふうに私が言えば、「あ、そう、詩のつもりなんだ」と思う人がいるでしょう。「ふーん」「で？」「あほらし」「……」という具合にいろいろな反応が考えられます。

詩であるためには支持が必要なようです。

私が、上の三行を小説だと言っても、同じ反応が起きるでしょう。「えーっ？」という反応がかえってくれば、もう少し長くすればいいだけです。エッセイ、「文章の書き方」みたいな実用文、批評、書評の一部だと言っても、大した違いはないでしょう。

要するに、「詩です」と言うのは、「詩です」と決めていると考えられます。詩でも小説でもエッセイでも同じです。「決める」は「名づける」や「呼ぶ」と同じだと考えられます。ただし、「決める」には支持が必要です。支持されないと、決めても決まりません。

(なお、言葉が決まる(名づけられる)とは、その言葉をつかうと決めるという意味です。その意味が何か、つまり意味づけは後手に回ります。こんなことをしていれば問題が起きるのは明らかです。)

＊

詩は抽象だと思います。観念だと思います。ですから、「詩」があるというよりも、むしろ「詩というもの」があるというふうに私は考えます。

一方で、「詩のようなもの」もあると思います。「詩らしきもの」、「詩みたいなもの」、「詩もどき」、「詩的なもの」もある気がします。どれも、抽象であり観念だとは思いますが、「詩」と「詩というもの」の抽象度はきわめて高い感じがします。

抽象度が高いとは、「決めた」感が強いという意味です。「詩のようなもの」「詩みたいなもの」は「決めた」感が薄くて、個人的には好きです。

詩というもの

詩のようなもの

上の二つをよく見てください。上のほうが偉そうですね。下は頼りない感じ、うさんくささも感じますが、うさんくささの点では上も相当なものですから、下に謙虚さ感じ、好感をいただきます。

*

あなたは、愛を見たり触ったことがありますか？ 真理を見たり触ったことがありますか？ 宗教、法則、時間、無、民主主義、文学、哲学はどうですか？

詩とは何か？ 小説とは何か？ 愛とは何か？ 民主主義とは何か？

こうした問いが、これまでに数えきれないほど多くの人たちによって口にされても答えが出ないのは、決めたからだと考えられます。どれもが「決めたもの」なのです。

「決めたもの」には、支持されないと安定しないという特徴があるため、ああでもないこうでもないという人の争いが起こるといえるのはわかりやすい理屈ではないでしょうか。支持争奪戦です。

*

話を詩と小説に絞ります。

詩と小説が何であるかと悩むのはしんどいと思います。抽象的な議論になるからであり、具体的には、上で見てきたような支持争奪戦にまきこまれるからです。支持争奪戦

は人間関係の問題として立ちあらわれます。心当たりがありませんか？

「詩とは何か？」

答えの出ない議論なんて馬鹿らしいと思いませんか？

「いいですか、あなた、小説というものはですね」

うんざりしませんか？

ざっくりゆったりと「詩（小説）のようなもの」を目指してはどうでしょう？ マイペースでいいんです。くだくだと名指すより、ざっくりと目指すのがいちばんです。

ただし、大好きな、愛している作品をたくさん読んで、そこから学ぶ必要があります。これは大切です。あなたの愛しているその作品が何かなんて考えなくていいと思います。愛に名前なんて要りません。抽象的な「愛」も、「愛する」ことで具体的な行為となり生きます。

その作品を名指すのではなく目指すことが大切。あとは、あなたの手と指を動かしてあなたの作品を書くだけです。

どうしても名指しなかったら、あなたが目指した結果として書いたものを名指しましょう。「これは小説です、これが小説なんです」と。説得力があるはずです。まだ書いていないものは名指せませんから。

知らない人

＊

気持ちと顔や表情が一致しないとしたら、さぞかし生きにくいだろうと思います。たとえば、いつもにこにこしているように見える人がいます。テレビによく出る人にも身近にもいます。

大変だろうなあと勝手に心配しています。四六時中にこにこしている人なんて考えられないからです。

体調や機嫌が悪いときにも、目だけでなく眉と目尻までが下がり、しかも目が細く見えると想像すると、つらいだろうなあと思います。生きていれば笑ってはいけない場面がたくさんありますから、そんなときには苦労なさっているのではないかと同情しないではられません。

得になることもあるにちがいません。ほほ笑んでいるとか笑っている顔や表情は、まわりをなごやかにします。人のためになるのですから、得ではなく徳になるというべきでしょう。人徳です。

個人的な話になりますが、どちらかというが強面なのが悩みです。むすっとしているつもりではなくても、そう見られるなんてざらです。でも、目を細めてほほ笑むと赤ちゃんが敏感に反応して笑みを返してくれることがあり、そんなときにはうれしくて涙ぐむことさえあります。

＊

気持ちと顔や表情が一致することなど、まれではないでしょうか。表情とか顔つきは印象に左右されます。悲しいことに他人の印象です。他人が決めるのです。だから、自分の自分と他人の「自分」とのあいだに、ずれが起こります。

自分が悲しいのに自分が笑って見えるのだとすれば、その「自分」は自分にはどうにもならないと言えます。このままならさが自分に対する異和感になるのではないのでしょうか。

ところで、ふだんは違和感と書くのですが、この文章では異和感とします。たとえば、村上春樹（『1973年のピンボール』（講談社文庫）の p.12）や古井由吉（『杏子』（新潮文庫）の p.134）の文章で見かけたことがある表記です。

今回、あえて異和感とするのは、自分が異物であるという感情について書いているからです。言葉と文章にも顔と表情があります。あえてふだんとは違う表情をすると、どんなふうを受けとられるかと気になります。

＊

自分を器とか乗り物にたとえる例は多いですね。自分が自分の身体という殻の中にあるとか、自分が自分という乗り物に運ばれているように感じられる、そんなイメージです。小説や映画や絵画でもよく出てきます。この場合には明らかに自分に分裂が生じていますが、分かる気がします。

長身である自分に異和感を覚える。こんな顔じゃ嫌だ。この性格を変えたい、直したい。あの人に成りかわりたい。自分の声が嫌で仕方ない。あなたの指とわたしの指を取り替えてくれない？ 誰でもいいから自分以外の人間に生まれ変わりたい。ぼくは「外人、外人」と言われて育った。ある仕草や表情を無意識にしている自分を動画で知り、それ以来気になってならない。美容整形を、大小含めて、十回している。もはや来世しか楽しみがない。蒸発や失踪して別の人格として生きたい願望が強くある。

＊

他人の決める「自分」が自分への異和感となるのではなく、自分の中で見知らぬ自分とその領域をしだいに広げていく場合があります。これは、異和感というよりも異物感というべきかもしれません。異物とは自分です。

知らない人にやたら挨拶される。ここはどこ？

＊

知らない人にやたら挨拶される。

心当たりはありませんか？ ご自分でなくても、身のまわりにそうした思いをかかえている人がいませんか？ これは深刻な問題であり、誰もがそうした心境になるリスクをかかえています。ここまで来ると自分に対する異和感ではなく、世界に対する異和感なのかもしれません。世界がじわりと異物になる。ふとした瞬間に世界が異物に感じられる。

ここはどこ？

この場合の世界は、自分という殻がすでに壊れて、自分が世界そのものになっていて、「ここはどこ？」はその「世界」からの静かな悲鳴なのかもしれません。自分にとってもっとも身近な人が、この言葉を発したのを目にし耳にした経験があります。悲しかったです。これもまた決して人ごとではありません。ここまでくると、人は言葉が失われていく過程を生きているのかもしれません。こちらからの言葉がもう通じなくなっていくので想像するしかないです。

*

気持ちと顔や表情が一致しないとしたら、さぞかし生きにくいだろうと思います。たとえば、いつも不機嫌であったり怒って見える人がいます。テレビによく出る人にも、ごく身近にもいます。

そのごく身近な人ですが、さいわいなことに知らない人にやたら挨拶されると感じている気配はありません。ただ知っている人から挨拶されないとは昔からぼやいています。「知らない人からやたら挨拶されるよりはいいでしょ？」といつも慰めています。

掛け橋

＊

「ここはどこ？」という叫びやつぶやきは、場所を尋ねているのではない気がします。そういう言葉を発する人を見ていて、「ここ」も「どこ」も場所を指しているのではなく、まして場所を指す名前と置きかえられるものでもないと感じました。

施設の名称、その施設のある町名、おおざっぱにどこどこと教えたところで、納得する気配はありません。何度も何度も「ここはどこ？」と言います。あれは尋ねていたわけではない、といまになって思います。

だいじょうぶだよ、僕はここにいるよ、うんうん、ご飯食べた？、おいしかった？、何か欲しいものある？　こんなふう言葉をかけてやるほうが、安心はしないまでも、険しい表情がやわらぐような気がしました。気がしただけです。

あっちがどう思っているのかは、ぜんぜんわかりませんでした。いまとなると、もうわかるすべがありません。あのときにはあっちとこっちのあいだに掛かる橋があったのに、いまはないのです。

手を握ってやる、頭を撫でてやる、指をさすってみる、肩に手を置く、吸い口を唇に当てて飲むかどうか見てみる、足に触れる、鼻が触れるくらい顔を近づけてほほ笑んでみる。

声を掛けるだけでなく、何らかの動作をして相手に触れるほうが、相手のおびえた目が落ちついたような記憶があります。ほかの人のことは知りません。こちらは初めての経験でとまどうばかりでした。

＊

自分がどこにいるのかは自明なようで不明な気がします。物理的にどこにいるかさえ不明に感じられるのは、自分でも危ういと思うのですが、よく考えます。考えずにはいられないのです。

知識や情報として知っていることが物理的な場所なのだとすれば、自分が気になっている「ここ」は、町名や番地として知っている「ここ」ではありません。

目を二秒ほどつむってみてください。次に目を開けてまわりを見てみてください。自分のいる場所を確認するつもりでよくみてください。

たぶんあなたはPCかタブレットかスマホの画面にうつったこの文章を読んでいると思います。目はつむらなくてかまいませんから、この文章に目を向けたまま、自分のいる場所を思いえがいてください。思いだすとか、思いうかべるでもいいです。

その思いえがいた場所か風景か映像みたいなもの、それが私の気になっている「ここ」なのです。誰かに教えられた町名や番地という数字や建物の名前や「居間」「台所」「待合室」「電車内」「車内」ではなく、いまのあなたの頭のなかにある「ここ」なのです。

あなたはこの文章のなかにながら、あなたのいるまわりを思いえがく。あなたはどこにいるのでしょうか？ またはゲームでも YouTube でもいいです。動画や音楽のなかにある「ここ」にいるあなたは、同時にあなたのまわりにある「ここ」にいるのではないのでしょうか。

自明であるはずの「ここ」が不明に感じられませんか？

*

こういう説明しにくい微妙な話ができる友達がないので話したことはなく、あなたにつたわっているか心もとないのですが、私のいう「ここ」とはそういうものなのです。そもそもそれが場所であるのかさえ不明なのです。

夜寝入り際に、目を開けて視界に見える範囲内の寝室を見まわし、見慣れた場所であることを確認し、安心して眠りに入りそうになりながら、いたずらな気持ちが起こって

目を閉じ、いまいる寢室を思いえがくことがあります。目を開けたり閉じたりして遊ぶのです。

そんなときの心境は、あえて言葉にすれば「ここ」と口にすることで十分なのです。ほんとうは「ここ」という言葉も不要なのです。「どこ」なんて思いはないのです。それを「ここはどこ？」と言わせるのは、そばに誰かがいる気配を感じるからだと思います。誰かがそばにいないときには「ここはどこ？」とは言わない気がするという意味です。

場所は人と人のあいだで立ちあらわれる虚構ではないでしょうか。虚構とは掛け橋です。相手がいて掛かる橋なのです。架空の橋、空（くう）に架ける橋、架け橋。「ここ」はそれだけで完結しています。誰かの気配を感じたとたん、「ここ」は「どこ」になります。「ここ」を見ている目を感じたとたん、「ここ」は「どこ」に変わるとも言えるでしょう。

相手の気配が「どこ」を誘いだすのです。

虚構とは距離を置いてながめることだという気がします。架空の橋、空（くう）に架ける橋、架け橋。距離が生まれることで動きも生まれます。それが場であり物語ではないでしょうか。「ここはどこ？」は場所という物語の出だしなのです。「むかしむかし」というおまじないのような言葉と同じく、距離つまり隔たりをつくり、動きがはじまるという合図なのです。

「ここ」から「どこ」へとつづく橋、それは人と人をつなぐ掛け橋でもある気がします。

寝入り際の思いのなかで、こんなふう場所に言葉を口に、場所について考えはじめるととたんに目がさえて眠れなくなります。「ここ」より先には行かないほうが眠れそうです。いまでは向こうに行ってしまったあの人も、あのころはそんな「ここ」にいたのではないかと想像せずにはいられません。

誰が語っているのでしょうか

＊

置きかえた瞬間に、そこに立ちあらわれるのが名詞だと思います。名詞が名指してそこに何か固定される。名詞も「名指す」も、それに相当するものが自然界には見当たりません。あえて言うなら、自然界にあるのは動詞（「動き」ではなく「動く」）ばかりなのです。

名詞も動詞も名詞であることに変わりはありません。人のすることなすことのすべてが名詞だからです。人の書いた文章に名詞が満ちているのは当然でしょう。動詞という名の名詞も含めての話です。動きは動いてはじめて「動く」なのだとも言えます。

人は不自然であり、つまり名詞的であり、動きをあつかうのがきわめて不得意だと考えられます。人は動きを名指して固定しないと、つまり言葉に置きかえないととらえられないようなのです。

動きを言葉にした瞬間、それは名詞になります。動きだけでなく、もののありようも言葉にしたとたんに、名指されたもの、つまり名詞となるのですから、名詞は名指と表記するのが妥当ではないかと思うほどです。

誰が語っているのでしょうか。上のような文章を書いているとそう思います。「名詞を名指と表記する」とか「名詞も動詞も名詞であることに変わりはありません」なんて尋常ではありません。ふつうではないのです。

「語るは騙る」なんて言い回しもそうです。言葉の音（おん）や形（かた）の「似ている」点や面にうながされて言葉がつづられています。「論理とか理屈というもの」にうながされていないことは確かです。

こういう騙りは、レトリックとか言葉の綾とか駄洒落とか言葉の遊びとかに、置きかえることができますが、誰が語っているのでしょうか。言葉が語っているなんて言えば、まさに騙りでしょうが、すべてのかたまりが騙りだと居直れば、そうも言えそうです。

＊

何とでも言えるのが言葉の特徴です。この「言う」も「語る」も「騙る」も「書く」も、「置きかえる」とそっくりの身振りをしているように見えます。どれもがそっくりな点がそっくりなのですが、このそっくりさんたちをそっくり置きかえて「名詞にしている」と考えてみましょう。

「名詞にする」とは手なずけているのです。名づけることで手なずける。手なずけるのは、怖いからです。手ごわいから名づけて、つまり名前をあげて、餌づけるのです。餌は生きがいのをあげるのがいちばん。生餌です。なまえをあげるのです。供物に似ています。

こわいものをなづけて餌いならず。不思議であったり、恐ろしいものや、ものありようを「これは〇〇現象と言うんですよ、ほかにもあります」「ああ、それは〇〇効果、よくあることです」というぐあいに。名づけることで何にも解決されていないのに、個々の事象の事情を切りすてて解決済みとする。人の常套手段でもあります。げんに、ここでもやっていますね。

そもそも機能に限界があるのは視覚だけではなく、知覚全般や脳自体にも抜けがあるみたいですから、人にとって不思議や謎や「わからない」があるのは常態であり、名づけて解決済みの振りをするのはきわめて杜撰（ずさん）つまりテキトーだと言わざるをえません。

誰が語っているのでしょうか。誰が語っても騙ることになると思います。

名前をつければ手なずけた気持ちになれます。手なずけて餌いならず。慣らすは均すです。でこぼこしたものを平らにするのです。そうです、平ら、平たいです。平たくすればやさしくなります。易しい、優しい。やさしくして、痩せさせたいのかもしれない。スリム、シンプル、やさしい、やすい、痩す、やせる。

＊

瘦せば扱いやすいでしょう。やすくなるのです。太いよりも瘦せているほうが扱いやすい。大きいよりも小さいほうが入れやすいし入りやすい。小さくする。細くする。絞るのです。●→・。小さくすればチョロいよと思っているのかもしれませんが。いや、そうにちがひありません。人の考えそんなことです。

濡れてふくらんだ雑巾を絞って細長くするだけではなく、カメラのレンズなんかで絞りという場合の「絞る」、音を絞る、話題を絞る、人数を絞る。口をすぼめる感じです。「酸っぱい」なんて言うときの唇を思いえがくとわかりやすいでしょう。梅干しを思いだしてください。

一本化するイメージ。「決める」もそうですね。束をまとめて一本化を目指すのが「決める」のイメージ。抽象もそうです。余分だと思われる部分を切り捨ててスッキリ痩せたものにする。捨象なんて言って抽象の親戚です。痩せて細いほうが入りやすいし入れやすいからです。ごちゃごちゃぐちゃぐちゃして容量が多いと、入れにくいし、伝えにくいし、うつしにくい。

これはシンプル、さくさくと読める、事実は単純明快なの、一言で言えないものは真理ではない。

誰が語っているのでしょうか。誰が語っても騙ることになると思います。

＊

誰が話しているのでしょうか。

話す、放す、離す。音がそっくりなだけでなく、イメージが似ているのです。何かはなれていく。むこうにいつてしまう。たぶんあっちにいつて消えてしまう。それが話す、放す、離す、です。すぐに消えるのですからはかないですね。

いつまでも、しつこく居座る「書く、搔く、描く」よりはましです。「かく」はすごく不自然なんです。反自然と言ってもいいくらい。かいてもじつはかいていないので、もがき、あがくしかありません。えんかくそうさなのです。つまり、遠隔操作であり隔靴搔痒。

話す、放す、離す。書く、搔く、描く。それぞれの言葉の身振りの「振り」、つまり動きや、形、つまり様子が似ているのです。似ていれば、口で繰り返して聞きくらべたり、並べて見くらべて「おお、似ているわ」と感心したり、置きかえて「同じだよ」と納得できます。

「似ている」は人を惹きつけます。赤ちゃんや幼児を見るとわかります。こどもを見るとわかります。おとなを見るとわかります。

話をつづけるためには、似ているでつづけるのがいちばん相手を安心させられます。話が飛ぶと相手が混乱して怒りだすこともままあります。適度に飛ぶのはかまいませんし、相手が面白いこともあります。反復と変奏を適宜に、です。音楽と同じ。

音が似ていなくても、イメージや振りや感じが似ていればだいじょうぶです。「似ている」は人を安心させます。

こういうのは、人の常套手段でもあります。げんに、ここでもやっていますね。というか、ここではまさにそういう話をしているのです。

＊

似た音、似たイメージや振り。こうしたものが人を安心させます。人は「似ている」が好きなのです。たぶん嗜癖（しへき）しています。依存しているという意味です。「似ている」が先に来て、底にある感じ。「似ていない」は、ぜんぶ「異なる」とか「違う」となります。「似ている」に一本化されるのです。「似ている」と「その他もろもろ」という感じ。「異なる」は刺身のつまなのです。

というか、人には「異なる」がとらえられないようです。たぶん、気づかないのです。逸（そ）れる、ずれる、外（はず）れる、誤（あやま）る、ずれる、すれ違う、違（たが）うしかない。ひょっとすると怖くてまともに向きあえないのかもしれない。見ていない振りをしている感じも濃厚です。「似ている」を見ているほうがずっと楽でしょうから。

いずれにせよ、「似ている」と「その他もろもろ」なんて大ざっぱですね。絞らないと、

人はものごとをとらえられないからです。視界にある枠はふだん認識されませんが、人は枠にとらえられています。枠でとらえているのではなく、枠にとらえられているのです。こう考えると、人の内にも枠があると考えられます。

視界とか視野には枠と同時に焦点があります。これも絞りです。絞らないと見えないのです。人は自分が思っているほど視力がよくないのです。脳もそうにちがひありません。機能だけでなく、容量が制限されているのでしょうか。枠と絞りは似ています。同じとは言いません。「似ている」は印象であり、検証できません。そもそも、ここでは検証可能な話はしていないのです。

一方、同じや同一は印象ではないようです。たぶん計器や道具でないと、はかれないし検証できないと思われます。同じや同一は人知を超えているとも言えそうです。「似ている」しかとらえられないし扱えないのですから。せいぜい「そっくり」とか「激似」という言葉でお茶を濁すしかありません。

原則として同一は世界にたった一つしかないはずですが、でもその検証は人の知覚には荷が重すぎるのです。似た物と偽せ物の区別ができないという意味です。せいぜい「た」と「せ」が違うことしか見分けられません。しかも本物の似物や偽物の本物があって、ことをややこしくしています。

大切なことなので繰り返しますが、「同一」は人には検証できません。きわめて精密な機械が必要です。そんな機械にも誤差があるそうです。やっぱり「似ている」は楽です。人に向いています。

＊

おそらく人は、枠があり絞った視野とか視界で世界を見ているのでしょう。その視界では「似ている」が基本になります。「似ている」は篩（ふるい）とか簾（すだれ）みたいに細かい格子状をしていると思われます。格子なんて言うと、整然としたイメージがありますが、人の視野はまばらでまだらなのです。人は「似ている」に合わせて「見ている」のです。

まばらでまだら状の網越しに、絞った視野で、まばらでまだらな「似ている」を見ている。そんな感じではないでしょうか。これは、見ている本人にはわからないし、検証で

きないという意味でたわごとにほかなりません。ここではたわごとしか話していません。

なにしろ、いまお読みになっている文章は小説なのです。タグも付いています。フィクションですから、実在の人物や事物または場所とはいっさい関係ありません。

*

誰が、かたっているのでしょうか。誰が、はなしているのでしょうか。誰が、かいているのでしょうか。

誰があるいは何が……。たぶん、こう書くべきなのだろうと思われます。言葉をかたり、はなし、かくという不自然なことを人がやっているから、こんな込みいったことになっているのではないか。そんな気がします。きっと人はもてあそばれているのです。チョロいよと思われているのです。言葉に、です。

ここにいと、君と

＊

.....ここにいると、君と僕との間に起きた出来事が記憶ではなく小説のように思われてくる。僕がこうやって過去の出来事の記憶を言葉としてつづっているせいだろう。書かれた記憶は、まるで小説のようだ。自分の書いた文章を読み返していると、いったい誰が書いた物語なのだろうと不思議な気持ちになることがある。たしかに書いたのは僕だ。書いた記憶があるからね。ただいったん書きとめられ文章となった出来事の記憶を読み返すと、はたしてその文章は僕が本当に書いたのだろうかという思いが頭をもたげてくる。そういうときの僕はひどく疲れているのだ。

身体がないのに疲れるのはおかしいと人は思うにちがいない。でも疲れるんだ。頭だけになった、いや正確に言えばおそらく脳か意識になったらしい僕なのに疲れは感じる。眠くもなる。そして眠りに落ちる。夢を見る。夢を見ない眠りもある。夢を見たのを覚えていない場合もあるにちがいない。そして目覚める。ここはどこ？ 寝覚めが悪いと、決まってそう思う。少し考えて、ああいつものここね、とつぶやき、諦めとともに完全な覚醒を待つ。すっかり目が覚めると、ネット内をあちこち歩き回るか、考えごとをする。

考えごとばかりに耽っていると收拾がつかなくなっていらいらすから、こうやって思いを文書にする。言葉はその時々のおもいや感情を文章という形で固定するから、支離滅裂になりがちな僕の思考を抑制しなだめてくれる。書かれた言葉を眺めていると不安が消えて気持ちが安定する。そんなわけで、文章を書いているときがいちばん生き生きする。いったん書かれた文章には妥協するしかない。いじり出すと収まりがつかなくなるからね。最近よく考えるんだけど、ただ書いているだけでは駄目だ。ただひとり言を書いているのと、君に当てたメールを書いているのとは雲泥の差と言っていいほど違う。君に話しかけると、僕は幸せを感じる。

書くのに疲れると、例の感情に支配される。これは誰が書いた文章なのだという疑問だ。自分が自分以外の誰かの書いている物語の中にいるような居心地の悪い気分だ。いっそのこと自分が架空の存在だったらどんなに楽かと思うことがある。そんなときには自分を突きはなして見つめている自分を感じる。自分は突きはなされているのだけど、何か大きな存在に身を任せている安心感がある。.....

曖昧な顔

＊

退屈なときには言葉に会いにいきます。辞書で好きな言葉を引き、その語義をながめるのですが、電子辞書だとその言葉のまわりにある親戚など、全体が見わたせません。私は意味を手早く調べるためには電子辞書を、読んだりながめるのには紙の辞書を、というふうにつかいわけています。

日本語では「かげ」を訪ねるのが好きです。何度会いにいったことか。ひらがなで二文字の「かげ」が部屋の扉になり、その「かげ」という名の扉を開けると、影、陰、蔭、翳が会釈しているのが見える。それぞれがいい顔をしていて、いい表情を見せてくれます。

読むというよりも少し目を離して見ているだけで心が安らぐのですが、顔を見にきたつもりがつい読んでしまい、時を忘れることもあります。「かげ」にとっては、読まれることは不本意であるにちがいません。かげは見るものなのです。

きょうは「かげ」のうちの「影」だけの顔を見てみます。影は幼いころの記憶と結びついています。影ほどつねにそばにいて、不思議に思わせてくれる友達はいません。なにしろ、自分の影です。誰もが影を持っています。

いつもいっしょです。薄暗いところはもちろん、かなり暗いところでも影がいます。感じるというべきかもしれません。ひょっとすると影の気配が自分ではないかと考えることがあります。寝入り際にふいに訪れる考えなのです。

寝入り際には、このように昼間に考えると荒唐無稽に思えることがリアルに迫ってきます。

＊

辞書を見ていると「かげ・影」にはいくつもの語義がありますが、そのなかでも好きなイメージ二つとたわむれてみます。鏡や水面にうつる影、そして影絵のように壁や障子にうつる影の二つです。

鏡に映る自分、障子に写る自分の影のように、「うつる」が映ると写るというぐあいに移りかわるさまが面白くてわくわくします。こういうたわむれが好きなのです。言葉の音と文字と意味とイメージがからみ合っているのでしょうか。

こっちはながめているだけです。自分が参加しているとは思えません。映画を見ているのと似ています。映画には参加はできませんから。一方的だという点では、映画は夢に似ていますが、夢はもっと荒唐無稽で強引で、有無を言わせないところがあります。

人は影をつくったり、影を見ることができても、影そのものにはなれないようです。人はつねに見る側にいるからです。人が見なくなったとき、たぶん人ではなくなっているはずですが、もちろん、いまのは比喻であって、視覚や視力のことではありません。

＊

数年前に犬を飼っていたことがありました。窓際に置いたケージというか、サークルに入れておくと、退屈そうにしている犬が、動きながら自分の影や、柵がつくる影の模様をよく目で追っていました。

どんな思いでいるのだろうか？　どんなふうに、その目にうつっているのだろうか？
動きだけを追っているのだろうか？　そもそも色はどんなふうに認識されているのか？

そのうち、犬がこっちの視線に気づいて、こっちに目線をうつします。目と目が合います。その目の表情に負けて、サークルから出してやったり、抱きかかえることがありました。

ほとんど黒目ばかりとっていい目なのですが、濡れてきらきら光る瞳にこっちの顔がうつっていて、どきりとしたことを思い出します。そういう瞬間には相手が犬だとは思えません。

影を感じる相手とは、うつるの関係にあるような気がします。うつるの関係とは、相手とのあいだに血縁に似たつながりがあって、同じ夢を見るほどのきずなで結ばれているという意味ですが、悲しいかな、これは一方的な思いでしかないようです。

誰かと同じ夢を見るというのは、それこそ、ありえない夢なのです。夢はひとりで見るものです。いや、誰かとともに見る夢とはうつつのことのもかもしれません。

誰かとどころか、集団で見る夢がうつつ。うつつから夢うつつをへて覚めて、ようやく人はひとりになれる。これが夢です。

そう考えると、夢こそがくつろぎの時だと考えられます。ほんとうに、そうなのでしょうか？ 考えれば考えるほど悲しい考えです。

*

あの時に犬の目に見たものも影なのですね。一方的な思いでしかない、夢。

というか、学校の理科で習った網膜とかいうものを考えると、私たちの見ているものはすべてが影であるということになりそうです。水晶体——なんと綺麗な言葉なのでしょう——というレンズを通して網膜にうつった影を見る仕組みが、目ということでしょうか。

影が影を見ている。映画も影、テレビも影、液晶の画面にうつった映像も文字も影。音も機械で再生され複製された音（こだま・木霊）という影。耳という影が影を聴いている。

影の影の影みたいにつながっているのが、人と人、人と物、人と生き物との関係なのかもしれません。影の影の影。もし、そんなものがあるとすれば、だんだん薄くなっていくような気がします。

夢に夢見るにも似ていますが、言葉を重ねると、濃くなるどころか、薄くなっていくようです。言葉自体が現実には永遠に追いつけない、まばらでまだらな影なのですから、

重ねあわせると、それだけ不透明になるのです。

濃いのが反対が薄いというのは言葉の綾だと分かります。現実には割りきれない曖昧なもの。すっきりした言葉は現実から遠ざかっている印でしょう。

＊

影である言葉を重ねることで、伝言ゲームや糸電話みたいにだんだん頼りなくなっていく感じ。濃いのは薄い。薄いのは濃い。

かげがうつる。かげがうつろう。かげがかげる。かげがうすい。うすばかげろう。かげろう。眠くなると、そんなふうには、連想ゲームをしていきます。かげろうが出てきました。

かげろうって何でしたっけ？ 辞書で調べてみます。

「かげろう」が四つありました。陽炎、蜉蝣・蜻蛉、陰郎、影ろふ・陰ろふ。

思い出しました。見覚えがあります。意味はどうでもいいのです。大切なのは顔です。「かげ」とその親戚はどれも曖昧な顔をしています。だから好きなのだと思います。

「あなたの好きになる人は、きまって曖昧な顔をしていますね」

むかし、そう言われたことを思い出しました。

演じる、ふりをする、なぞる

＊

朝の連続ドラマを見ていて、思わず引きこまれている自分に気づき、苦笑することがあります。テレビドラマにせよ、映画にせよ、演劇にせよ、振りをする身振りが基本にあるわけですが、連続ドラマはとて分かりやすく、ずっと入っていて、自分もその「振り」を容易に「なぞる」ことができます。

振りをするが基本のお芝居では、俳優が配役を演じています。当たり前なのですが、これはとても興味深いことだと思います。誰もがそれが「演技」つまり「振りをしている」と知っているのにそれを一時的に忘れるのですから。それが現実のように思いこんでいるわけです。心の隅で、これは演技なのだと分かっている、楽しむためにはその野暮な考えを捨てなければなりません。

振りだけがある世界。配役がどんどん変わる。既視感の連続。何かに運ばれていく快感。同じ身振りが繰り返される。似た光景が現われて消えていく。仮面が演じる。仮面が踊る。仮面の素顔が刻々と変化する。動きと表情だけがあるマスカレード。

連ドラを見ている人はかなりの数になるでしょう。視聴者の年齢層も背景も物の考え方も多種多様であるにちがいません。それだけ多様な人を惹きつけるためにはいろいろな工夫がなされているはずです。連ドラには長い歴史があり、つちかわれたノウハウがあると想像できます。

ぱっと見て場面の状況が分からなければなりません。俳優の顔や表情や演技を見て、「あ、これから何か起こりそうだ」とか、「この人は悪役っぽい顔をしているから悪いことをするに決まっている」とか、「この間（ま）の取り方は、伏線だ」という具合です。いま言葉にしましたが、こういうのはたぶん瞬間的に察知するはずです。

演じる者も演技を見る者にも文法みたいなものが備わっているという言い方もできそうです。昔読んだケネス・パークの『動機の文法』（訳者は森鷗外のお孫さんである森常

治さん)にそういうことが書かれていた記憶がありますが、その本はもう手放したので確かめられません。本もなし記憶もなしとなるとでっちあげるしかありません。

でっちあげるといえば、「振りをする」とか「演じる」という身振りには「でっちあげる」とか「つくる」という部分があるのではないのでしょうか。それが独創とかオリジナリティなのかもしれません。

振りをするとは何かをなぞっているのですが、それが忠実な再現であるはずはなく、あくまでも再演なのであって、見よう見まねとか、記憶をたどりながらたどどしく振りを演じるとか、「もういいや、適当にやっちゃおう」とか、あれよあれよと何かに取り憑かれたようにやってしまうということもある気がします。

こう考えていると、いまの私の「でっちあげ」みたいに、自分でもはっきり意識したことのない何かに導かれたり促された結果としての「振りをする」があってもおかしくないのではないのでしょうか。つまり、何かをなぞっているつもりが、その何かが不明になり、頭の中が真っ白みたいな状態で何かをやってしまうという感じです。

こうなると脳か体かその両方にあるのか分かりませんが、やはり何らかの「文法」みたいなものの存在を想定してしまいます。空をぼけーっと見上げていて、そこに浮かんでいる雲の形にいろいろな物を見てしまう。その場合の「見る」とは「なぞる」ではないかと思います。

雲の流れが速いときなんか、あれよあれよと見えているものが変わっていきます。それが同時的に空のあちこちで起きていて、收拾がつかなくなり、ぐったりして目をつむることがあります。あれよあれよとは真剣に見るものではなさそうです。

朝の連ドラも肩の力を抜いて、お掃除をしながらとか、外出の準備をしながら、ついでに見るものなのでしょう。早起きなのでお掃除はどうに終り、これとってどこかへ出かける用もない年寄り、生きているついでにぼーっとテレビの画面を眺めるしかないようです。

演じる、まねる、つながる

＊

自分の振るまいが演技だと感じられ、それを意識したとたんに自己嫌悪におちいる。いやいやながら、その行動演技を続けているうちに我慢できなくなって、その場を立ち去る、あるいはその行動にかかわる人とのつながりを絶つ。振りかえると、そんな人生を歩んできました。

まわりからは嫌な人間だと思われてきたにちがいません。また本音はめったに口にしない性格なので、不可解な奴だもと言われてきた気がします。人間関係が苦手だという言い訳ではとうてい済まされない不義理を重ねてきました。

そんな生き方をしてきたせいか、人と人との関係やつながりが濃密に書きこまれた小説を読み通すことができません。途中で嫌気が差すのです。人間関係に対する興味を維持できないのかもしれない。

見知らぬ者同士が出会い、短い交流があったのちに別れる。小説でも映画でもテレビドラマでも、そうしたストーリーだと熱心に読み、食いつくようにして見ます。どんな作品かといえば、旅行記やロードムービーが挙げられます。

誤解を招きそうな言い方になりますが、映画だと『ジャッカルの日』のような暗殺物や『レオン』のような殺し屋の出てくるストーリーが好きです。原作が犯罪小説である、映画『太陽がいっぱい』も忘れることができない作品です。

残酷な場面や犯罪行為を好むからではなく、基本的に一人で任務を遂行しなければならない暗殺者や殺し屋や犯罪者という役割と、余計な人間関係を排除しなければならない非日常的な状況に惹かれるのではないか。そう自己分析しています。

こんなふうだから友達ができないのです。

誰かと人間関係をもち、それを維持すれば、必ず演じるという身振りが出てきます（一人でいても人は「演じる」のですが、それは別の機会に書こうと思います）。たとえば、友達同士と簡単に言える関係において、一時的にあるいは長期にわたって、きょうだいのように振る舞ったり、親子のような関係になったり、恋人同士あるいは夫婦に似たやり取りやかかわり合いが生じることがあります。

（ところで、きょうだいらしくするとか、ふつうの夫婦らしく振る舞うとか、親として子としてとは、どういうことをいうのでしょうか。何を手本にして真似ればいいのでしょうか。）

面倒くさいといえば面倒くさいです。

人と人が触れあえば、そこには関係性が生まれると同時に役割が生じるとも言えるでしょう。上下関係、主従関係、対等、いじめるいじめられる、癒やす癒やされる、支える支えられる、愛す愛される……。こうした関係性は、「する・される」という単純なものではなく、その立場が一時的であったり、あるいは逆転することがあります。

このようにして、人は多面体プリズムになるのですが、言葉はそうした人の実相に追いつけません。言葉は人をめぐる現実を必ずしもそのまま反映しているわけではないというわけですね。当然のことながら混乱が起きます。

「いいよ、いいよだめだ、だめだ」、「丁寧に説明します何もしません」、「いいわ、いいわいやよ、いやよ」、「好きだよ嫌いだ」、「そのとおりですちがうだろーが」、「手を洗わせてくださいおしっこがしたいです」、「もうだめですもっとお願いします」、「アタリメスルメ」、「大丈夫、任せて知るもんか」、「ご飯はまだ食べていませんパンは食べましたけど、何か」――。

二枚舌。建て前と本音。表と裏。多義性。両義性。婉曲語法。ダブル・ミーニング。ダブルスタンダード。ダブルスピーク。Mの世界。

いまのは半分冗談本心ですけど、そうした腹の探り合いを妄想してしまう人間は、人間関係を避けるようになるでしょうね。もしもこんなことが頭の中で渦を巻いているとしたら、はっきり言って、それは被害妄想にちがいません。

いずれにせよ、人と人が出会ったり、いっしょにいれば、そこに「演じる」と「真似る」が生まれます。それが「つながる」にほかなりません。

人は鏡です。鏡同士が向かいあえば、「うつる・映る・写る・移る・伝染る」が起きるのは当然でしょうね。それが面倒だと感じる人は人付き合いが苦手です。

かといって、演じるうつる対象がなくなるなんてことはありません。ひとりでいても、人は誰かを演じているのであり、誰かと同じ身振りを演じているわけです。自分とは他者の断片からなる引用の織物やパッチワークだと見なすことができるでしょう。

演じる、真似る、つながるは、人にとって必然であり当然だと言えそうです。

誰もが鏡であり、鏡を持っています。そして、そこには必ず誰かが映っています。あなたが一度も直接見たことのない人です。それなのに、あなたにとってはおそらくいちばん近い人です。

嘘だと思ったら、鏡を見てください。そこには鏡瞳があるはずですが、そこには自分あなた= I eye という他者自分=眼 meme が映っているはずですが。

ちなみにだから何？、ひとみは人見から来たという説もあるみたいですが？。さらに言えばもう、やめたら？、虹彩は英語で iris ですがふーん、二つの点が目に見えませんか目が点ですわ？ 見えませんね失礼しました。

note でルビが使えるようになったので、ルビで遊んでみましたに遊んでもらいました。

【※申し訳ありません。電子書籍ではルビが反映されません。】

指す、ふれる、ふるえる

＊

株については何も知りませんが、ニュースで株式市場の大きな動きが報道されるたびに頭に浮かぶのがハムスターです。昔飼っていたことがあり、そのときにピクピク体を動かすのを不思議な気持ちで眺めていたのを思い出します。

は一ちゃんという名前を付けて可愛がっていました。小動物は短命なので悲しい思い出もあるのですが、ときどきこうやって記憶の中にやってくるあの小さな動物を愛でています。

自然と手と指が動いて、あの子を撫でていたときの感触がよみがえりはっします。鳥肌がたつことさえあります。触覚的な記憶のリアルさは言葉にしにくいです。それを意識した瞬間に不意打ちを食らうのです。

テレビで動物の生態を撮した番組を見るのが好きなのですが、小動物を見るとそのピクピクやピクピクやキョロキョロやタタターという仕草に魅了される自分がいます。

やっぱり株に似ています。正確には株の値動きというのでしょうか。かつて翻訳業をしていて、仕事の幅を広げようと金融関係の勉強をしたことがあります。数字や数式に弱いので、とても苦労しました。

そのときにも、以前に飼っていたハムスターの動きと似ているなあと感じたのを覚えています。

株式や商品の相場では、値動きをリアルタイムで表示するわけですが、それは数値であったりグラフであったりします。新聞での表示は静的なものですが、ネットでの表示はまさにピクピク、ピクピク、キョロキョロ、タタターなのです。

デジタル化された数字がまばたくように細かく点滅することがあります。グラフの線もよく見ると微かに点滅していたりします。生き物を見ているような錯覚におちいりますが、これは錯覚ではなくひょっとしてまさに生き物を目にしているのかもしれない。

数値もグラフも何かを指しています。さす、指す、差す、刺す、挿す、注す、点す、捺す、鎖す。辞書で見ると、ぞくぞくするような漢字が出てきます。要するに、点のような微細な面積を何かが貫くというイメージでしょうか。

点を貫くものが何かというと、線であるわけですが、その線も点の集まりであったり点の連なりであったりするのではないのでしょうか。要するに点が動いて線になるということなのか。中学か高校でそんな話を授業中に聞いた記憶があります。あれは数学、いや科学とか物理の授業だったのか。

こういうご託を並べていると、physics（物理学）と metaphysics（形而上学）は似たような身振りをしていると感じます。ビッグワードを使ったビッグマウスでした。冗談です。身の程知らずな発言をお許してください。

ピクピクというと、針が数字を指すアナログ式の量りや、ガスのメーターのような測定器を連想しますが、ああいう針は指しながら振れます。大きく振れる場合もあれば、小刻みにピクピクすることもあります。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

やっぱり株式の値動きはピクピクでありピクピクです。つまり震えということですね。ビビっているとしか思えません。

あの動きは誰かのおびえであったり、驚きであったり、喜びであったり、思考停止とか判断停止であったり——あの動きの前にどんな思考や判断が可能だということでしょう、任せるしかないのではないのでしょうか（何に任せるのかも分からないままに）、全面降伏です、まかせ、まけるのです——、錯乱であったりするのではないのでしょうか。

やっぱり生き物です。生きてるとしか思えません。世界でみんながピクピクしている。指すを見て、ふれるのです。そしてふるえるのです。擬人化する生き物であるヒト

にとって、その目に映って動くものすべてが生き物であり、森羅万象という名の自分の身体のみを映す鏡なのです。

ピクピクという身振りだけがひとり歩きをしているかのよう。ピクピク、ピクピク、どきどき、きょろきょろ、おろおろ。

振る/振られる

＊

note でルビを振ることができるようになって嬉しいです。ルビとは、主に漢字の横や上に小さな振り仮名を付けることだったようですが、いま「主に」と書いたように、ルビを振られる対象は漢字に限りません。私なんかへそ曲がりなので、本来とか、もともとというのが苦手で、そこからはずれたことをしたくなります。

ぶれるわけですね。何かに触れて、つまり軽くぶつかって、その反動を楽しみながらちょっとよける感じ。ずらすにも似ています。要するに素直じゃないんです。

『村上龍料理小説集』の「Subject 5」に面白い試みがあります。ある男性が昔関係のあった女性と偶然に再会する。女性の横には小さな女の子がいる。男性は女性と会話しながら、同時にその女の子とも会話する。そんな話なのですが、母親である女性の話す言葉にルビが振られています。そのルビが女の子の言葉だという趣向です。

ネタバレにならないように気をつけて要約しましたが、ルビの使い方という点ではネタバレになったかもしれません。ごめんなさい。こんなルビの楽しみ方もあるということで、ご勘弁願います。

note には器用な方がたくさんいらっしゃるの、いろいろな斬新な試みがなされるのではないかとワクワクしています。ルビ詩とかルビ小説なんて具合に。二つの物語（詩）が同時進行する。ある物語（詩）の終り（最後の連）で結末が二つに分かれる。建て前と本音が併記された小説（散文詩）。ルビに乗っ取られる一種の文字禍の掌編——。

上で紹介した村上龍の掌編の要約を読んで、何かひらめいた方がいらっしゃいましたら、お書きになった作品をぜひ読ませてください。

ところでなんで、ルビを「振る」というのでしょうか。こういう疑問が浮かんだときには、すぐには調べません。ああでもないこうでもない、うじうじ考えるのが楽しいの

です。ま、振り仮名と関係ありそうだと思います。ちょっと言葉を並べて遊んでもらいます。

かなをふる。まな、真字、真字。かな、仮字、仮字。

本当のものと仮の姿というイメージでしょうか。まなにかなをふる。まなかな。ふーむ。深いですね。漢語系の言葉に大和言葉を振るというのも面白そう。逆に大和言葉に漢語を振るのもぞくぞくします。以前にやったことがあります。というか、常に頭の中で大和言葉（和語）と漢語を行き来して楽しんでいるみたいです。

「振る」と言えば、fool と full が英語の原文にあり、それが駄洒落になっていて、それを日本語でも駄洒落にした、そんな話を柳瀬尚紀先生から伺った記憶があります。大学生時代に翻訳学校にも通っていて、そこの授業で聞いたのです。柳瀬先生は常に英語と日本語での言葉遊びを考えているような人で、とてもチャーミングな翻訳家でした。

こういう原文があるんだけど、なんとか洒落にならないからな、というふうによく授業で話を振るのです。あるとき、先生の作った訳文に「よこしま」という言葉が見えたので、「さかしま」はどうですかと提案してみたところ、それはいいと先生がおっしゃってメモなさっていた覚えがあります。原文の作者名とか、どんな訳文だったかはすっかり忘れてしまいました。残念です。

翻訳でルビを使って、駄洒落を処理したり、註の代わりに地名や人名の説明をする場合がありますが、個人的には好きです。ルイス・キャロルの作品なんかは言葉遊びが多いので、邦訳ではそうした例には事欠きません。そんなわけで、訳書を開くと字面が黒めでべたーっとしていたりします。

そういう字面の文章の書き手で思い出すのは、高山宏先生と蓮實重彦先生です。ルビはもちろん傍点（傍点はルビを使って作るみたいです）などの約物をやたらお使いになるので、字面がべたーとしていきます。絨毯の複雑な模様にも似ています。

高山先生は概念や物や言葉をつなぐ名人ですから、真字/仮字という「ルビの原則的な使用」（比喩です）を、西洋/東洋、日/英、センス/ノン・ナンセンス、真偽、正誤、真贋、虚実、正邪、善悪、聖俗といったペアにまで広げて、各ペアの両者をつなげてしまうというアクロバットのような芸を見せてくれます。約物と各種レトリックを多用した魔術

的かつ華麗な文体は、アリュージョンとイリュージョンに満ちあふれ、ときに書かれている内容に書かれている文章の言葉が擬態するとか、シニフィエにシニフィアンが擬態する、あるいはその逆もあり——という様相を呈します。

蓮實先生の文章では、たとえば「近い」という言葉が本当に「近い」のかという疑問を常に意識し、人が文字通りに言葉を取るという錯覚と抽象にきわめて敏感であり、要するに言葉による錯覚を検討しつつ抽象と断定を周到に回避しながら書き進めるような言葉の身振りを実践なさっているのです、必然的に文章が読みにくくなり、その結果の一つとして字面がべたべたとします。

高山先生と蓮實先生の言葉の身振りを足して二で割ると丸山圭三郎先生の文章になる、なんて言いたくなりますがやめておきます（書きましたけど）。言い直します。丸山先生は「似ているものをつむぐ名人」です。「似ている」は「同じ・同一」と異なり印象です。たとえばラカンとソシュールは似ているなあと感じると、それに似ていることが先生の著書『言葉・狂気・エロス——無意識の深みにうごめくもの』に書いてあるのです。とても便利です。考えの整理ができるからです。

そうした個人的な理由から、あの本が好きです。現代思想でややこしいところは、たいていあの本の中で扱ってあります。さまざまな固有名詞が出てきますが、丸山先生は自分の問題として記述しているところに共感を覚えます。自分なりに解釈して説明しているので読みやすいという意味です。あとレトリックも大変お上手です。これは大切なことだと思います。特にああいうややこしいことを扱う場合には。

『言葉・狂気・エロス』を読んで、あるいは読みながら、フーコー、ドゥルーズ、デリダ、ジョルジュ・バタイユ、マラルメ、ベケット、ウィトゲンシュタイン、ニーチェを読むと、「似ている」ところを感じて、つまり既視感を覚えて、分かったような気分になります。分かった気分ではありません。分かったような気分です。「分かった」は同一性とか本物を指向しますが、「分かったような」は似ているへのこだわりだと言えます。「分かる」や「悟る」を求めている、つまり欲深くない人には最適の本だと思います。あの本の字面もべたべたとして、いい顔をしています。

とりわけ、ジャック・デリダ、ジャック・ラカン——ラカンの残したテキストは少ないのですが、だからこそ、結果的にソシュールやマラルメと同じく曖昧放置プレイの名手として名を残しているとも言えます、寡黙、場合によっては沈黙（死者は饒舌なレトリシャンです）と「テキストの不在」こそが最強のレトリックなのです——、ミシェル・

フォーコー、ジル・ドゥルーズといった書き手は、言葉の多義性や多層性、ひいては言語の限界性を意識したうえで文章（＝レトリック）をつづったのですから（ほんまかいな）、その文章について語る文章やその翻訳が、ルビや約物を使わざるをえないのは当然であり必然だという気がします（もちろんこれは趣味とレトリックの問題でもあり、使わない強者もいます）。

以上、ふる、振る、震る、狂る、旧る、降る、触る、full、fool というお話でした。

触れる、振る、震える

＊

満月や月というと狂気を連想する人は多いようです。lunatic という言葉からの影響が考えられます。辞書にある語源の説明を見ると、その経緯が書かれていたりします。ウィキペディアの解説も面白いです。

あと、full moon と fool moon という言葉遊びもありますね。同じような駄洒落を人は思いつくみたいです。「狂う」がらみでいうと、正気のサタデーナイ沙汰でないとか。確かに、夜になると人は程度の差はあれ、ふれます、とりわけ「ハレ」っぽい週末には。

こうしたきわめて多くの人、あるいはそこそこ多くの人に共有されたイメージがある場合には、詩や小説や音楽や映画やテレビドラマで、似たようなイメージが繰り返され、さらにイメージが拡散されていきます。いまバンド名の LUNA SEA が頭に浮かんだので、ウィキペディアの解説を読んだところ、やはり LUNACY という名称が出てきました。ウィキペディアは便利で大変お世話になっています。

言葉には辞書に載っている語義だけでなく、集団（大きさはさまざまです）に共有されているイメージがあったり、おそらく一人だけにしかいだかれない私的なイメージがあります。後者は誰かに話せば「あほか」と言われるのがオチで——話せば話すほど正気の沙汰ではないと思われま——、他人に分かってもらう必要のないものですが、だからこそ大切なのです。

(たとえば、個人的なイメージの「(その日の) 集大成」である夢を記録した作品の多くは他人には退屈であったりしますが、格好をつけたり脚色したり体裁を整えると「名作」になることもあるでしょう。言葉にすることで、よくできた別物になるからです。)

私的なイメージは自分だけのものですから、愛しいです。おそらく死ぬ間際にまでついてきてくれるでしょう。もしもシカメよカメさんよ。この歌詞を耳にしたり口にするたびに、月でカメさんに電話をしている(旧式の電話機です)ウサギさんの姿が浮かぶのですが、私はこの心象を愛おしく思っています。

ふれる、触れる、振れる。

気がふれるという言い方が気にかかります。琴線に触れるというフレーズを連想するのです。

琴の金色の線（糸・弦）に何かが触れて、線が振れ、空気が震える。そんな光景が目には浮かびます。金色の線から金色の空気の波がつぎつぎと円を描いてひろがっていくのです。弱いながら艶のある光を感じて見上げると、弦月半月が濃い紫の空に見えます。月は、金と銀のどちらにも見える微かな色をしています。あ、ウサギさんだ——。そう思ったとんに、夢ゆめうつつから覚めます。または別の夢ゆめうつつへとうつります。さめてもさめてもゆめうつつなのです。

こういうのを狂ふれるというのでしょうか。少なくとも、このふれる、ふる、ふるえるは美しいです。右か左か、どちらかにいっぱいふれてもいいけど、またもどりたいと願うのは、うつつに未練があるからかもしれません。無意識的な安全弁というわけです。

ところで、触れると触れられるは同時に起こっているはずですが。触れ合うというわけですね。人同士の——相互的な——触れ合いの話に絞ると、体が二つない限り、人はどちらか一方にいますから、相手のことは想像するしかありません。つまり、触れ合いとか、相手側の「触れる＝触れられる」は抽象になるわけです。他者を前には想像するしかないということです。

いま考えているのは「であう」と「あう」です。あちこち、話がうつってふれてごめんなさい。言葉がテーマに（あるいはその逆に）擬態するのです。

触れる、ふる、ふるえる。

蓮實重彦の『批評 あるいは仮死の祭典』に、蓮實によるジル・ドゥルーズへの書面によるインタビューがあります。そこで蓮實は「遭遇」という言葉を使って、ジル・ドゥルーズに話を振ります。するとドゥルーズからはいくつかの固有名詞が出てくるのですが、個人的には次の箇所にとくにとくします。つまりふれてくるのです。

”好きな作家というか、わたしを震撼させる作家は、ニーチェとアルトーで、ある強烈さをもってわたしの存在を貫いた人びとです。強度のレクチュールが可能な人びとです。”
(蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』・せりか書房 p.83)

ふれる、それによってふるえることがあったとしたら——。さらには、つらぬくがあったとしたら。

「ニーチェ」と「アルトー」は「狂気」という言葉と親和性のある固有名詞です。精神疾患の話をしているわけではありません。人と人との触れ合いの話をしているわけでもありません。あくまでもある言葉が別の言葉呼び寄せているという状況に目を向けているだけです。深読みなさらないでください。

人にとって「わかる」とは、文字通り言葉にできない未知のものが「わかる」というのではなく、「ああ、あれだ」というぐあいに既知のものを確認する（つまり「わかる」）作業であり、そうやって「実は知っていながら、たまたま忘れていたものや気づいていないもの」に「置き換える」だけだ。言葉にできない未知のものを「わかる」＝「わかる」ことは人にはまずできず、そうした稀有なことがあるとすれば、それはむしろ「あう・ふれる」（であう・ふれあうではなく）＝「遭遇」ではないだろうか——。

以上は、蓮實重彦経由によるジル・ドゥルーズの言葉の身振りにふれて、私なりにまとめたものなのですが、とりあえず、いまも私はそんな気がします。他者を「わかる」はなく（「み・わかる」はあっても）、他者とは「あう」ことしかない（この状況を可能性と見るか限界と見るかは見方の問題であり人それぞれでしょう）、と図式的にまとめることもできます。

とはいえ、誰もがジル・ドゥルーズのような「遭遇」を体験できるわけではないと思います。文字通り言葉にできないような（「なんもいえねえ」は立派な言葉であり決まり文句です）、そしてほかのイメージにも置き換えられないような個人的なイメージに「ふれる」ことが（「ふれあう」ではなく）、誰にとっても可能な「あう」（こちらは個人的な語感の問題ですが、「であう」ではなく）なのかもしれません。たぶん、それは荒唐無稽であったりとりとめのない体験ではないでしょうか。あえて言葉にするなら。

触れる、振る、揺らす

＊

書こうとしても、とっかかりがないと書けないことは、みなさんが日々経験しているのではないのでしょうか。言葉が出ないときには、どんなことをしていますか。

自動筆記とか自動書記とかオートマティズムといった横着な書き方があるそうですが、どうなのでしょう。すらすらと言葉が出てきて、人はそれを書き写すだけみたいな状態らしいのですが、経験したことも見たこともありません。

言葉を呼び寄せるルーティーンとかおまじないがあり、それを利用している人もいるでしょう。コーヒーやお茶や煙草のようないわゆる嗜好品を使う人が多そうです。清涼飲料水やお菓子も嗜好品と見なす場合もあると聞きます。さすがに物を書くときにお酒に頼るとなると抵抗を覚えますが、人それぞれです。

薬物やいわゆる麻薬によってインスピレーションを得て書いたといわれる文学作品があります。ヒッピーという言葉が生きていた時代にはそうした薬物の摂取が文化となり、生き方となっていたらしいのですが、私が大学に入ったころに急速に収束した、いやもう過去のものになっていた感がありました。

大学進学のために上京した年の春、好奇心からさっそくこわごわ新宿駅周辺を歩いてみたのですが、フーテンもフォークソングゲリラもきれいに消えていました。あれ一つ。拍子抜けしたのを覚えています。

その後学生時代にはオルダス・ハクスリーの書いた『知覚の扉』という本が流行っていました。私も持っていましたが、ぺらぺらめくっただけで辟易しました。私には合わないみたいです。そのタイトルだけが印象に残っています。知覚の扉なんてカッコいい言葉だと思います。

嗜好品や薬物によって言葉呼び出す。このように図式的に書くと分かりますが、よく考えると呼び出す対象である言葉こそが最強の嗜好品であり薬物だという気がしてなりません。嗜好品や薬物に依存し嗜癖するように、人は言葉に依存し嗜癖していると言えるのではないのでしょうか。

人の言葉への依存は相当なものだと思います。人は何かを食べたり水分を取らないと死にますが、言葉がなくても死ぬまではいかない気がします。それなのに、人は言葉と表象のためなら何でもやりかねません。そう考えるとますます言葉や表象が嗜好品や薬物に思えてきます。

自然界では得られない、あるいは自分では生成できない、言葉という「麻薬・魔薬」を呼び出すために麻薬・魔薬をもちいる。やはりヒトはややこしい生き物だと思わずにはいられません。話を戻しましょう。

触れる、振る、揺らす。

とっかかりのない私は、こんなふうに言葉を並べて言葉に来てもらいます。名詞でもいいのですが、最近は動詞ばかりに遊んでもらっています。そうなのです。私は言葉に遊んでもらうのです。たぶんこれはレトリックではないです。実感であるとしか言えません。

動詞は文字通り動きを指す言葉ですから、動きをうながしてくれます。たとえば、「祭り・まつり」という名詞だと動きへとうつれません。まして「おまつり」というと「お」を付けただけで名詞感が高まり、私なんかは言葉が出なくなってしまう。

「まつる」とするととたんに動きを感じます。

まつる、たてまつる、あがめたてまつる。まつ、待つ、まつわ、いつまでもまつわ、俟つ、まかせる、まける、たのむ。

論理や体系など無視した一種の連想ゲームなのですが、それに行きつると、辞書に助けてもらいます。

纏る、奉る、献る、祭る、祀る。

並んだ言葉たちに見入ってしまいます。わくわくぞくぞくそわそわします。

＊

話を戻します。触れる、振る、揺らす、でしたね。

いまイメージしているのはサイコロです。サイコロを振って転がし目が出るのを待つ——これを私なりに分けると、触れる、振る、揺らすなのです。サイコロに触れなければ振れないわけですが、実は何に触れているかは不明なのです。

その「何か」を「宇宙を支配する偶然性」なんてたわごとで置き換えることもできそうです。たわごとにはちがいませんが、リアルなイメージです。「何か」に触れて、それを揺らす。

本当は揺れるわけがないのです。それほど「何か」という相手は手強いし、圧倒的に大きい。でも、サイコロに置き換えて、転がし、揺らすしかありません。これって言葉のことじゃありませんか？ 歯が立たないから、相手を言葉（表象）というものにすり替えて、これはチョロいぞと自己暗示をかける。これって人のやっていることじゃないですか？ サイコロは賭けに使いますが、まさに賭けているのです。

サイコロは賽子、骰子とも書きますね。サイコなんて言葉が浮かびます。こういう邪念はノイズとして退けるのではなく、そこにいてもらって眺めています。せっかく来てくれたのですから、失礼なことはしたくないのです。

サイコロといえば、ステファヌ・マラルメというフランスの詩人の『骰子一擲』という作品に触れずにはいられません。私の中ではサイコロといえばアインシュタインではなくマラルメなのです。

こういうのを大風呂敷を広げると言いますね。話がややこしくなりそうなので、私にとって大切なイメージだけお話しします。

マラルメという固有名詞で私が勝手に連想している個人的なイメージですから、実に

たわいない話なのです。私にとって、言葉と向かいあうことは、無数の目のあるサイコロを振っている身振りにほかならず、えいやーっというふうにサイコロを転がして、何らかの言葉という目が出てくるを待つことが、私にとっての「書く」であり、書けるかどうかは賭けなのです。

いまもそんな感じで書いています。ひたすら待つのです。まつわ、いつまでも、まつわ。すべてお任せして、待つのみ。

ご降臨とか光臨を待つなんて構えちゃいけません。無心で待つ。俟つ。コツはわんちゃんやねこちゃんのへそ天のかまえです。全面降伏。負けて任せる。これがいちばんのようです。一種の賭け。かける、賭ける、懸ける、掛ける、駆ける、書ける。

人はサイコロを振って転がし言葉の目が出るのを待つ——これを私なりに分けると、触れる、振る、揺らすなのです。サイコロに触れなければ振れないわけですが、実は何に触れているかは不明なのです。やっぱり賭け。

しかも揺らしてもびくともしない。それなのに書けることがあります。書けちゃうんです。最良のギャンブルには種はないと言います。だから、そんな賭けで書けたとしても、何かが揺らいただけではなく、揺れたのは人だけみたいなのです。でも書けたのだから贅沢は言えませんね。またサイコロを振りましょう。

であう、あう、でくわす

＊

文章を読んだり書いていて、言葉のある身振りが気になってしかたがなくなることがあります。いま気になるのは「～してみる」の「みる」と、「～しあう」の「あう」です。「してくる」の「くる」と、「するようになる」の「なる」も気になるのですが、とりあえずは「みる」と「あう」に向きあってみたいと思います。あら、出ましたね。「むきあう」。

昔の人（大雑把な言い方で申し訳ありません）の文章に「して見る」という表記があります。一方の「し合う」はいまの人が書く文章にもよく見られますし、私もそのときの気分で「しあう」とも「し合う」とも書きます。

”私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、出来るだけ正直に、ざっくばらんに、有りのままの事実を書いて見ようと思います。”
(谷崎潤一郎『痴人の愛』から引用)

【※上の例は『痴人の愛』の冒頭、つまり第一段落の第一文ですが、第二段落の第一文は「考えて見ると」で始まります。】

たとえば、「ちょめちょめしてみる」という場合には、相手の顔を見て、その反応を確かめながら「ちょめちょめする」感じがしますね。いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。「ちょめちょめしあう」だと、相手と顔を合わせて、相互に反応を確かめながら「ちょめちょめする」光景が目には浮かびます。いやしく聞こえたら、失礼しました。谷崎先生の文章を引用した直後だからなんて言い訳はしません。

(ちなみに谷崎先生は何ととっても「して見る」タイプの書き手だったと思います。読者をナンパする(『テキストの快樂』におけるロラン・バルトの言い回しです)ために頻繁に変えたとしか考えられないそのねちっこい文体は、常に読者の反応をじとーっと見ているかのようです。)

こう考えると「して見る」と「し合う」という表記に説得力を感じますが、表記に関しては私は誰もが好きなように書けばいいと考えているので、どっちがいいかとか、どっちにすべきかという話をしているわけではありません。

「してみる」と「しあう」とでは、「しあう」のほうが気になります。このところ、「みる」についてしきりに考えていたのですが、だんだん「あう」のほうに興味があつてきました。

「あう」についてはブログで連載記事を書いたことがあり、以前から気になっている言葉です。私は文法が苦手なので、「彼女にあった」の「あう」と、「彼女と向きあった」の「あう」の違いについて、文法書を見ることはありません。まず上の「ちょめちょめ」のように、あれこれ想像します。その後で、せいぜい辞書を引くくらいです。

で、該当するところを辞書で調べてみましたが、やっぱりねと思う説明でした。不思議なことは、いきなり調べるよりも、あれこれ自分で考えるほうが好きです。私は正解とか分かるを求めてはいません。ああでもないこうでもないというプロセスが楽しいのです。

「であう」という言い方には「であい」という言い方につきまとっているイメージ（出会い系のこと）が重なるので、使うのを避けたい。さらには「おちあう」とか「しめしあわせてあう」という意味あいのない、つまり偶然にあうという意味での「であう」という意味に似た言葉がないかと探していて、辞書で「ゆきあう」と「でくわす」に出くわしました。

「でくわす」がいいなあ、いまは思っています。

ここで引用をさせてください。

＊

”人にとって「わかる」とは、文字通り言葉にできない未知のものが「わかる」というのではなく、「ああ、あれだ」というぐあいに既知のものを確認する（つまり「わかる」）作業であり、そうやって「実は知っていながら、たまたま忘れていたものや気づいていないもの」に「置き換える」だけだ。言葉にできない未知のものを「わかる」＝「わかる」ことは人にはまずできず、そうした稀有なことがあるとすれば、それはむしろ「あう・ふれる」（であう・ふれあうではなく）＝「遭遇」ではないだろうか――。”

以上は、蓮實重彦経由によるジル・ドゥルーズの言葉の身振りにふれて、私なりにまとめたものなのですが、とりあえず、いまも私はそんな気がします。他者を「わかる」はなく（「み・わける」はあっても）、他者とは「あう」ことしかない（この状況を可能性と見るか限界と見るかは見方の問題であり人それぞれでしょう）、と図式的にまとめることもできます。

（拙文「触れる、振る、震える」より）

＊

いま頭の中にあるのは、上の引用文にある「あう」なのです。

「であう」と「ふれあう」にまわりついている相互的な関係という意味合いが気にくわないのです。それなら「ふれあう」を「ふれる」とすればいいのですが、「であう」から「あう」を引くと、「で」になり、「でる」というふうに動詞の語尾をつけてやると、何だか違うものになってしまう。そんなことで悩んでいたのです。

「でくわす」なら問題はなさそうです。「でっくわす」とも言いますね。威勢のいい語感があります。ちょっと離れますが「不意打ちを食らう」も突然の出会いという感じでいいなあと思います。「ふいにあう」という具合にずらすこともできます。

引用文にもある蓮實氏の使っている「遭遇」という漢語系の言葉もありますが、個人的にはできれば「和語」でいきたいのです。「ふいに」を「不意に」と書くと、もともとが漢語っぽいようですが、私は大和言葉至上主義者ではないので、「ま、いっか」にしておきます。

本題に入ります。

考えているのは「あう」なんです。

たとえば人と人があう。あるいは人ともものやことがあう。「あう」といっても、夕立にあうは夕立に遭うと表記されることが多いですね。「遭遇」の「遭」を使うわけです。あう、合う、会う、逢う、遭う、遇う、和う、壺う、敢う、饗う。いろいろな「あう」があります。

漢字を使って「わかる」と、「わかる」と「わからなくなる」が同時に起こる気がしませんか。私にとって「わかる」と「わからない」と「わかる」は似ています。

同じとは言いません。似ているは印象ですから、個人的な思いでしかありません。私は印象派なのです。いまのは冗談ですが、もし私が自分用の辞書を作るなら、「わかる」と「わからない」と「わかる」を同じ項に入れます。いまのは半分冗談ですけど、半分は本気です。

「わかる」と「わからない」と「わかる」という、似ている動詞のグループに「あう」を入れたい。これは本気です。

たとえば人と人があう。あるいは人ともものやことがあう。あうことで、「わかる」と「わかる」と「わからない=わけられない」が同時に起きます。

この場合、「あう」は徹底して一方的なもの（こと）であると私は感じます。AとBがあうのだから、そこに相互的な関係が生まれると考えるのは抽象ではないでしょうか。無意味であるとか、まして間違いであるなんて話ではなく、抽象だと言っているのです。人は抽象を免れたり避けることなんてできっこありません。言葉という抽象（具象でもあります）を使っているのですから、当然のことです。

そもそも「相互」とは虫のいい、つまりご都合主義的なイメージであり、両方の側から「みる」だけでなく、自分を棚に上げて、高い位置から両者を俯瞰するようなメタっぽいかわしさを感じるのです。これは印象ですよ。私は印象派ですからさっき冗談だと言ったじゃないか。

「あう」とはあくまでも一方的なもの（こと）であり、あった相手については想像するしかない。まして相手との「あう」を距離を置いて「みる」なんていう視座はありえない（つまり抽象である）。

さらに言うなら、「あう」とは、相手を想像する余裕も、「あう」という行為を俯瞰する余裕もない（これは意見）、せっぱつまった「不意打ちをくらう」でなのである。

なんて言いたくなりました。こうなると「あう」というよりもむしろ「でくわす」ですね。一人で納得。では、言い直します。

”人にとって「わかる」とは、文字通り言葉にできない未知のものが「わかる」というのではなく、「ああ、あれだ」というぐあいに既知のものを確認する（つまり「わかる・みわかる」）作業であり、そうやって「実は知っていながら、たまたま忘れていたものや気づいていないもの」に「置き換える」だけだ。言葉にできない未知のものを「わかる」＝「わかる」ことは人にはまずできず、そうした稀有なことがあるとすれば、それはむしろ「あう・ふれる・でくわす」＝「遭遇」ではないだろうか——。”

以上は、蓮實重彦経由によるジル・ドゥルーズの言葉の身振りにふれて、私なりにまとめたものなのですが、とりあえず、いまはそんな気がします。他者を「わかる」はなく（他者を「みわかる・わかる」はあっても）、他者とは「あう・でくわす」しかない（この状況を可能性と見るか限界と見るかは見方の問題であり人それぞれでしょう）、と図式的にまとめることもできそうです。

あう、でくわす、ふれる

＊

粗雑な話になるのを覚悟して、単純に考えてみましょう。

AとBがあう、またはでくわす。それぞれが相手にふれることもあるだろう。

こんな状況とかストーリーを想像してみましょう。

AとBは、何でもいいです。人と人。人とももの。人とこと（この場合のことは現象とか抽象です）。ものともものとか、こととこととなると、物理学（physics）の領域に踏みこみそうなので、形而上学（metaphysics）的な枠内に踏みとどまりましょう。

なお、ここでの metaphysics とは、英和辞典にある「机上の空論」とか「抽象的論議」という意味です（リーダーズ英和辞典より）。要するにたわごとですので、無いものねだりはなさらないでくださいね。

よく考えると「AとBがあう」、これだけの話です。人は出会い、そして別れる。人生はそんなものさ。なんていうもっともらしい言い回しを連想します。そうなのかもしれません。

出会ってから別れるまでは何があるのでしょうか。交流、交際、付き合い、触れ合い。「交」は「まじりあう」です。付き合いにも触れ合いにも「あい・あう」が見えます。あいは愛だなんて言いたくなります。でも、言えている気がしませんか。

「僕たち、愛し合ったじゃないか」「はあ？」

これに似たやり取りがよくテレビドラマや映画や小説に出てきます。要するに「すれちがう」が生じたわけです。相手と自分の思いがくいちがうというのはよくありますね。思いだけじゃありません。「言った言わない」「やったやらない」と言い合い、言い争う。検証可能な食い違いもあれば、事実は永遠に不明なんて事態もありそうです。

人と人が出会い、そして触れ合う。お互いに見つめ合いながら、話し合いながら、肌と肌を接し合いながら、思いは離れたまま、合ったとしても部分的なものであって全面的な「合う」＝一致ではない。まして結合ではありえない。同床異夢のうつつ版です。

それなのに、「しあった」と過去形あるいは完了形で言い表し、それが「しあった」ことになる。

「僕たち、愛し合ったじゃないか」「はあ？」

よくある話です。ありすぎなくらい。こういうものだど腹をくくるしかないのかもしれない。

「合う」の「合」を漢和辞典の解字で調べると、「人十一＝蓋」で、それに口（容器）を合わせる、なんて説明があります。お鍋みたいですね。

それにしても、人という漢字はすごいですね。支え合うように、もたれ合っています。気になって調べてみると、立った人（一人です）が大股を広げている姿からきたみたいで、安心しました。

支え合うなんて、いかにもできすぎていませんか。ま、きれいな話ではありますけど。いずれにせよ、私は正しい正しくないには興味はありません。

何を言いたいのかと申しますと、「あう」とは「～しあう」の「あう」というよりも、であう、ゆきあう（いきあう）、つまり進み出であうというイメージではないか、なのです。言い換えると、相互的な関係ではなく、一方的なものということです。

あんた自身がそんな出会いばかり繰り返してきたから、そんな個人的なイメージで一般化しようと思っているんでしょ？ そんなご託で世界をまとめないでちょうだい。

なんて言われると返す言葉がありません。確かに「しあった」記憶がほとんどないの

です。一方通行とすれ違いばかりの人生——。自分でツッコミを入れて落ちこんでいれば世話はいりませんね。

他者との「であい」は、対象が人であれ、ものやことであれ、一方的なものであり、「あう」というよりも、「ふいにであう」という意味で「でくわす」というのがふさわしい、なんて言いたかったのですが、言う気が失せました。

話を変えます。

作品との「であい」を考えてみましょう。今回は、作品との「あう」について話したかったのです。小説であったり、映画であったり、楽曲やお芝居であったり、アート作品を思い浮かべてください。

その対象との触れ合いは「相互的な関係」ではありえません。一方的にこちらが見たり、読んだり、聞いたりするのが原則です。例外としては、楽曲やお芝居という形でのライブや実演があるでしょう。パフォーマンス＝作品との相互関係が成り立つ場合ですね。ただし理想を言えばです。その場合でも、どれだけの「しあう」があるのかは不明です。

小説や詩との「であい」に話を限ってみます。

作品という他者の間にあるのは、解釈です。こちらからの働きかけと考えることもできます。これまでの自分の知識や体験やいただいているイメージを総動員して作品と向き「あう」わけです。

予備知識があるとないとでは解釈が大きく異なるでしょうが、知識がなければ「あう」はないなんてことは断じてありません。知識には量と質がありますが、しょせん相対的なものです。解釈は個人的なものですから、人それぞれです。

作品から働きかけてくれることもありません。あるとすれば、それは擬人法や比喩をもちいたレトリックでしかないでしょう。

「僕たち、愛し合ったじゃないか」「はあ？」

こういうやり取りさえも成立しません。

でも、一方的でいいのです。

愛と性についてあれだけ書きつづった谷崎潤一郎や川端康成は繰り返し、「僕たち、愛し合ったじゃないか」「はあ？」を描いていたではありませんか？ シェイクスピアだってそうです。村上龍だって。

対象が何であれ——作品もです——、愛とは激しければ激しいほど一方的なものなのです。なんて言われても、気休めにもなりませんね。

否定的な言い回しを重ねましたが、私はこうした作品との「あう」は素晴らしい「あう」だと思います。「しあう」がなくても、です。

＊

”人にとって「わかる」とは、文字通り言葉にできない未知のものが「わかる」というのではなく、「ああ、あれだ」というぐあいに既知のものを確認する（つまり「わかる・みわかる」）作業であり、そうやって「実は知っていたながら、たまたま忘れていたものや気づいていないもの」に「置き換える」だけだ。言葉にできない未知のものを「わかる」＝「わかる」ことは人にはまずできず、そうした稀有なことがあるとすれば、それはむしろ「あう・ふれる・でくわす」＝「遭遇」ではないだろうか——。”

以上は、蓮實重彦経由によるジル・ドゥルーズの言葉の身振りにふれて、私なりにまとめたものなのですが、とりあえず、いまはそんな気がします。他者を「わかる」はなく（他者を「みわかる・わかる」はあっても）、他者とは「あう・でくわす」しかない（この状況を可能性と見るか限界と見るかは見方の問題であり人それぞれでしょう）、と図式的にまとめることもできそうです。

（拙文「であう、あう、でくわす」より引用）

＊

あなたと作品との「であい」は、あなただけの一回きりの「あう」です。それが記憶という形で回想され反復されることもあります。その作品と向きあった時間は人生で一

度しかありません。また次回があるとしても、「いまここで」の「であい」は唯一無二の体験なのです。

その「であい」を言葉にするのは難しいと思います。それでも、人に伝えるためには言葉にする必要があります。それはそれでいいのです。それしかないのですから。

とはいえ、あなたには、作品とのあなただけの唯一無二の時間があったのです。これからもあるのです。いまここにあるもの、いまここにあることを別のものに置き換えないうで、それを「身にうける」ことが、「あう」ではないでしょうか。

その「あう」のさなかには、言葉は浮かばないと思います。文字通りの「言葉が出ない」とか「言葉が出ない」状況です。たとえ、小説や詩のように、作品が言葉から成るものであってもです。

「あう」、「あってしまう」、「ふいにであう」、「でくわす」、「ふいうちをくろう」、「がつーん」、「ふれる」、「出来事=偶然アクシデント」、「あたる」、「ぶつかる」、「ぞくぞく」、「あれよあれよ」。

「ふれる」が「狂れる」であることは十分にありえます。というか、この「ふれる」こそが「あう」の正統であり正攻法であり醍醐味かもしれません。ふれたとしても、一時的なものであれば害はないでしょう。

震え、発汗、息切れ、咳、くしゃみ、鳥肌、動悸、発熱、目まい。そうした身体的な変化があらわれるかもしれません。語弊はありますが、それは発作に似た体のつぶやきであり声であり叫びなのです。寝込むことがあっても不思議はありません。

「あう」（動詞）とは頭をふくめた身体的なものだからです。頭だけの「であい」（名詞）ではありません。

あうはいまここにあるのです。具体的な体験として。ひょっとすると身体を貫く体験かもしれません。

作品の話をしていましたが、人との「あう」でも同じことが言える気がします。いま問題にしている「あう」は惰性の触れ合いではありません。とはいえ、初めての「であい」だけが「あう」だとは限りません。ぜんぜんそうではありません。

ひょっとすると、「であう」と「あう」と「でくわす」、そして「ふれる」は、夢に似ているかもしれません。さめていないさなかの夢ですから、思い出そうとしても、その名残や断片しか浮かばないかもしれません。それはそれでいいと思います。そうなるしかないのですから。

あと、夢を酩酊やカラオケや、忘我エクスタシー——大げさな言葉ですが、似たような体験は日常にあるはずで、ころあたりがなければそれこそ「あっていない」だけです——と考えるともっと分かりやすい気がします。とはいえ、大切なのは、こうやって別の言葉に「置き換えること」でも、分けることでも、分かることでもないの言うまでもありません。

とはいえ（何度も繰り返してごめんなさい）、「あう」は決して神秘的であったり特殊な体験ではないのです。やっぱり夢や酔いと似ています。

眠れない夜の遊び

＊

眠れない夜の遊び

星野廉

2022年4月17日 14:04

目次

言葉を転がす

顔をうつす

マスク

声を移す

真似る、シンクロ、影

取り憑く

呪術の時代に生きる

言葉を転がす

眠れない夜や、寝入り際に、私は言葉を転がします。

どうするのかと言いますと、ある言葉やフレーズをポンと投げて、それから連想する音（発音）や文字やイメージを、別の言葉ですくい取るのです。

たとえば、「犬・いぬ」が「去ぬ」になるのは同音のつながりです。「犬・いぬ」が「廉」になるのは、前に飼っていた犬の名前という連想です。「犬・いぬ」が「影」に転じるのは偶然です。

とりとめのない遊びであり戯れなのです。こんなふう言葉に転がしているうちに、眠りが訪れることもあり、目がさえてしばらく眠れないでいることもあります。

＊

私の書く記事はだいたい、言葉を転がしてできあがります。いい加減な人間なのです。

とっかかりがない状態で書く場合が頻繁にあります。とっかかりがないので、言葉をポンと投げて、言葉と呼ぶ感じで作文します。

今回はそれを意識的にやってみたいと思います。最近の記事に出てくる言葉、わくわくする言葉を投げたり、転がしたり、組み合わせながら作文してみることになります。

顔をうつす

「顔」も「うつす・うつる」も私の大好きな言葉です。字面を見ただけで、自分で口にしただけでわくわくしてきます。

＊

顔を映す。

鏡ですね。

顔を写す。

写真ですね。

顔を移す。

私の中では、鏡であり写真のことです。ただ、ひとさまは「顔を移す」でどんなイメージをいただくのかは分かりません。想像するだけです。

デスマスクでしょうか？ デスマスクもマスクです。すぐにこういうくだらない駄洒落が出ます。以前に記事でも書いたギャグです。

デスマスクは顔を移していますよね。その制作過程を想像すると怖いです。私はしたくないです。仕度無いデス。そんな心の準備ができていません。

マスク

マスク、仮面、マスカレード、仮面舞踏会。

わくわくしますね。

マスカレードといえば、この曲を思い出します。しかも、この動画を思い出します。

(動画省略)

カーペンターズによる This Masquerade ですが、なぜかマルグリット・デュラスの自伝的小説の映画化作品である『愛人/ラマン』(L' Amant) の映像が使われた動画になっています。

YouTube の醍醐味は、こういう編集に出会えることです。

その「なぜか」の偶然がすごくいい味の動画になっていることに驚きます。何度視聴したか覚えていないくらい好きです。音源も大きめで、中途難聴者の私には聞きやすいです。

*

デスマスクからマスカレードに来ましたが、この曲にうっとりしたので、次に行きます。

声を移す

声を移す。

声もわくわくする言葉で好きです。録音のことですね。

声を録る。

レコード、テープレコーダー、デジタル録音という流れでしょうか。

*

声を移すといえば、エコー、つまり、こだま、硯、木魂、木霊です。どの漢字もいい字面をしています。ぞくぞくします。「やまびこ」とも言いますね。山彦は名前みたいに見えます。海彦さんを思い出します。

自分の顔を水面に映して、恋して、水に落ちたという西洋の伝説がありますが、いろいろなバージョンがあるみたいです。諸説ありというやつです。

その水に落ちたナルキッソスが、こだまであるエコー（エーコー）という精霊と絡んでくる説もあるそうです。

*

姿を水面に映す。姿が移る。
声が移る。声が響く。声が伝わる。
音が移る。音が響く。音が伝わる。

いま人はこうした自然界の現象を自分で作り出すようになり、その作ったものに取り憑かれています。

自分の作った物に嗜癖しているのです。その最たるものは映像（姿）でも音楽（音声）でもなく、文字（意味）だと私は思います。

姿が伝わる。
声が伝わる。
音が伝わる。

言葉（音と形）が伝わる。

音声と文字が伝わる。

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

眠れない夜には、こうやって言葉を転がすのです。

こうした連鎖にイメージの韻を感じます。イメージが重なるという意味です。面白いですね。勝手につなげて感心していれば世話ないですけど。

広がりすぎたので、話を戻します。

真似る、シンクロ、影

声を移す。

声を真似る。声帯模写。

振りを真似る。形態模写。

私はこどものころから、物真似が大好きでした。物真似番組とかそっくりショーのたぐいには目がなかったのです。いまも「似ている」が大好きで好きすぎるくらいです。

これまでに「似ている」とか「そっくり」をテーマにずいぶんたくさんの記事を書きました。あらためて見ると呆れるほどです。

最近では「シンクロ」にも手を出していますが、基本的には「似ている」なのです。

「影」も「似ている」に似ています。こういうレトリックというかギャグの根っこにあるのも、「似ている」なのです。ここまで来るとビョーキかもしれません。

「似ている」に取り憑かれているようです。

取り憑く

霊が乗り移る。

霊が取り憑く。憑依。

このところ「うつる・うつす」をテーマに記事を書いてきましたが、「移る」の中に「乗り移る」という意味があるのがずっと気になっていました。

木の影が地面に映る。影が地面に移る。

木の影が水面に写る。影が水面に移る。

上のような例文の記事に使ったこともありましたが、こんなことをやっているうちに、私にとって「移る」がリアルにイメージできるようになってきました。

「映る」も「写る」も、ぜんぶ「移る」に面倒見てもらいましょう。そんな気分なのです。

なぜかと言いますと、みんな「移る」からなのですが、何が移るのでしょうか？

魂と心です。

心や魂が移るのです。姿だけではなく。

呪術の時代に生きる

心や魂が移るなんて、怪しいですか？ 妖しいですか？ 危ういですか？ 馬鹿らしいですか？

そうかもしれません。

でも、あなたは愛する人の写真を踏めますか？ 姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふう加工されて、冷静でいられますか？ 姿が映ったものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシャスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのですよ。

めっちゃくちゃ言って、ごめんなさい。「映る」も「写る」も「移る」だというのは本心だし本気なのです。正気かは不明ですけど。

なにも、おどろおどろしい話をしてるわけではありません。誰もが日常的に体験していることです。

＊

私たちは未だに呪術の時代に生きている、とまでは今回は言いません。

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。

#日本語 # 漢字 # 和語 # 大和言葉 # 文字# 漢字 # 鏡 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画
呪術

過剰で過激な想像力

＊

過剰で過激な想像力

星野廉

2022年4月18日 09:24

「映す」も「写す」も、姿だけでなく心や魂を「移す」ということで、今回はまとめたと思います。

眠れない夜の遊びにお付き合いいただき、ありがとうございました。
(拙文「眠れない夜の遊び」より引用)

昨夜もなかなか眠りに就けなかったので、うとうとしながら考えたことを思いだして言葉にしてみます。

目次

地面に映る

鏡に映る

人工の影

影を写す

言葉は最強の人工の影

過剰で過激な想像力

想像力を消していれば、ボタンが押せる

地面に映る

木が地面に映る。
木の影が地面に映る。
木の姿が地面に影として映る。

実際問題として何が移るのでしょうか。移動という意味です。影が映っているわけですが、その影って何ですか？

たぶん理系の問題みたいなので、理系的な発想ではなく考えてみます。光とは何かとか影とは何かなんて、私には荷が重すぎます。わくわくしません。

わくわくするどころか難しそうで気持ちが萎えてしまいます。

*

物が移っているわけではないですよね？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしか私にはできません。

姿が影として、その輪郭だけが歪んで地面にうつっている。いまズルをしました。映っているのか、移っているのか分からなくなったのです。

ひらがなは便利ですね。漢字と違って、分からないところを保留できるのです。ぼかせるのです。ひらがなモザイク説。

*

輪郭はいいですね。輪郭がうつる。木という物、つまり本体は移っていない。

これは確かでしょう。たぶん。

なんか変です。

輪郭じゃなくてシルエットではないでしょうか。輪郭は枠で、その中が塗りつぶされている感じですから、シルエットに訂正します。

*

木が地面に影として映る場合には、木という本体はそのまま、シルエットが地面にうつる。

あっさりとしら一と書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。謎ですから、なぞるしかなさそうです。空（くう）をなぞるのです。

想像するのです。像を想いえがく。イメージを抱く。抱きしめるのです。

鏡に映る

木が水面に映る。

木の姿が水面に映る。

実際問題として、何が移るのでしょうか。移動という意味です。地面の影とは違って、水面だと条件がよければ鏡みたいに映るわけです。

木の姿が鏡に映る。

これとほぼ同じではないでしょうか。映っているのは、姿であり、映像であり、鏡像とも言います。鏡像は私にとっては嫌な言葉です。理系ばいですよ。

辞書で調べてみました。やっぱり理系です。しかも数学とも関係あるみたいです。それに私の苦手な「鏡像段階」なんて言葉も載っていました。こういうもっともらしい用語はパスします。

*

物が移っているわけではないですよ？ 見た目で考えましょう。体感で考えましょう。それしかできません。

鏡に木が映っているのをイメージします。想像するという意味です。鏡を持って木のそばに行く気にはなれないのです。そんなところを近所の人に見られたらどうしましょう。

ただでさえ変人に見られているのに、へたすると通報されますよ。

「近所のおじいさんが、手鏡を持って桜の木のそばに立ってキョロキョロしています」

うちの居間でおとなしく想像しているほうが、ぜったいによさそうです。だいいち安全です。

*

木の姿が鏡像として鏡に映っている。木という本体の何かが移っているわけではなさそうです。木が傷ついたり、木の一部が欠けたり、減っているとは考えにくいです。

鏡像って何でしょう。理系的には考えられないので、想像しつづけます。左右が反対なんですよね。ところで、なんで上下はそのままなのでしょう。

なんだかとんでもない方向に行きそうなので、上下は考えません。

鏡像という言葉の意味不明なままに保留して使いつづけるのがいちばん、私にとって現実的な方法みたいです。

*

木が鏡に鏡像として映る場合には、木の本体はそのまま、その左右反対の鏡像が鏡にうつる。

あっさりとしらーっと書きましたが、不思議ですね。いったい何が起きているのでしょうか。

人工の影

ちょっと待ってください。

鏡に映す像は意識的にうつします。これは「写す」ではないでしょうか。さらに言うなら「移す」です。そもそも鏡は人が作るものです。人の作った物に人が意識的に像（姿）をうつすのです。

映像、影像、いや、むしろ影（かげ・えい）と書きたいところです。自然にできている影と、人工的に作った影とは違うと思います。

＊

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。写真であれば目的やテーマです。

（拙文「投げた影に影を重ねて見る」より引用）

そうでした。そういうことです。

＊

人は影に意味を見るのです。自然の影であれ、人工の影であれ、その影に意味を見るのです。この意味には、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などが含まれます。

各人が影に勝手に意味を見るのですから、個人的なものでまちまちです。意味は人の中にあるものですから、確認も検証もできません。何らかの判断をするためには、各人の証言が必要です。

証言は言葉という形をとります。話し言葉であったり、書き言葉、つまり文字です。

影の意味は、文字として固定され、「残る・残す」ことが圧倒的に多いと思われます。

＊

影に何がうつっているかは、一概に言えるものではなく、各人がそれぞれ影に何を見るか、正確に言えば何を五感で知覚するかである、なんて言えそうな気がします。

もっと正確に言えば、影で各人のいadakイメージは刻々と変わるにちがいありません。猫を検索して、画像検索をするといろいろな猫の画像が出てくるのに似ています。一定していないし、固定していないように思います。

影に何が移っているかは、客観的にも普遍的にもとらえられないということですね。各人による言葉による証言しか、判断材料はないわけです。頭の中を見るわけにはいきません。

しかも証言は当てにならないでしょう。刻々と移り変わりつつある自分の中にある「何か」を言葉にするなんて土台無理なのです。だいいち、言葉はその「何か」ではないのですから。

言葉はお茶を濁すために存在するようです。

*

とはいえ、言葉は大したものなのです。後で触れることになりますが、言葉によって、脳が暴走するのです（想像力のことです）。その起爆剤が言葉ですから、捨てたものではありません。

影を写す

人は影を意識的にうつします。影を作るのです。自分で作った影に意味を見たいからでしょう。正確に言えば、人は自分が見たい意味を見るために影を作るのではないのでしょうか。

ぜったいにそうです。さもなければ、わざわざ「鏡」（比喩です）を作ったり、その鏡に「影」（比喩です）をうつすなんて、面倒なことはしません。

人は自分の見たいものを見るために影を作り、あるいは見つくろった影を持ってきて、その影に自分の見たいものを見て、気持ちよくなりたいに決まっています。ぶっちゃけた話が、やらせなんです。

自分を基準にして人類を語って、ごめんなさい。

*

影を写生する。

絵による写生、描写。言葉による写生、描写。

この場合には、本体つまり被写体、写される対象は無傷のはずです。何かが減ったり加わったり、変化することはないでしょう。

せいぜい、写生される間に時間的な拘束を受けて、劣化する、腐敗が進む、あるいは成長するぐらいでしょうか。

*

影を写真に撮る。

静止影像としての写真、写真撮影。レントゲンやCTやMRIも含めていいと思います。

フィルムによる映画の撮影、デジタル映像による動画。これもCTとかMRIがある気がします。詳しいことは知りません。

この場合には、被写体は何らかの変化をこうむるようです。放射線を浴びるなんて、目に見えないし、その後遺症は時間の経過を待たないと確認できそうもありません。

あ、そう言えば私は、この種の撮影の前に何度も造影剤を飲んだことがあります。あれって体に何らかの影響を与えているはずですが、大丈夫なのでしょう。

フィルム撮影やデジタル撮影は、ただ見ているだけでは済まない気がします。人は撮りたい絵を取ろうとしますから、被写体をいじったり、移動させたり、光や風など環境を変える可能性が大です。

＊

映画や写真にはぜんぜん詳しくないのですが、撮影には加工、修正、編集がつきものだと聞いています。

よく考えると当たり前です。写真や動画は被写体である事物ではないわけです。

そこに特撮、漫画、アニメ、CGといったものを考えあわせると、訳が分からなくなります。

私には荷が重すぎます。研究でも探求でもなく、私は好きで楽しむためにやっているのですから、知らないことを調べて深入りはしません。

寝入り際にネット検索なんてできません。いまは眠れない夜のとりとめのない思いを思いだしているのです。

言葉は最強の人工の影

人はなんで言葉を使うのでしょうか？ 伝えるため、つまり伝達のためだけではない気がします。

人は気持ちよくなりたいから言葉を使うのだと思います。具体的には、言葉を入れたり出したりするのです。言い換えると、読んだり、聞いたり、見たり、触れたり、話したり、叫んだり、詠んだり、歌ったり、唱えたり、論じたり、書いたりします。ここには「伝える」も入ります。

伝えるとは他人とつながりたいからする行為ですから、やはり「気持ちよくなりたい」に通じると考えられます。じっさいには伝えようとして伝わることは難しいし不可能なことが多いのですが、それでもめげずに人はせっせと伝えようとしています。

読む、聞く、見る、触れる、話す、叫ぶ、詠む、歌う、唱える、論じる、書く、伝える
――。

どれも気持ちがいいです。適度に苦しいと、これまた気持ちがいいです。適度の締め付けや縛りは気持ちがいいものだということを、みなさん日常的に経験なさっているのではないのでしょうか。ああきつい、でも気持ちいいわ、なんて。

気持よくなるためにたしなむものに嗜好品と薬物がありますが、人にとって最高で最強の嗜好品であり薬物は何でしょう？ 言葉です。

人は言葉という最強の嗜好品であり薬物を楽しむために、さまざまな嗜好品や薬物をたしなんだり摂取します。

コーヒーあるいはお茶を飲みながら詩を書く、あるいは詩を読む至福の時。お酒をちびちびやり、好きな小説を読む最高の時間。書きものや読書の途中で煙草を吸う、これほど心が安らぐ時の過ごし方はない。そういえば、いわゆる麻薬やドラッグを服用して書いたと言われる文学作品は多いです。

お芝居や映画や楽曲やテレビ番組やネット上の映像にも、言葉がともないます。動きに満ちたスポーツも、言葉による解説と言葉で述べられるドラマがあってこそ盛り上がります。映像や音楽や動作を一種の言葉と見なす人もいます。

持論ですが、人が臨終という究極の時に必要とするのは、あるいは頭に浮かべるのは顔と言葉だと思います。この顔については、またいつか書きたいです。

(拙文「続・外にあって、外からやって来て、外であるもの」より引用)

*

話し言葉である音声も、書き言葉である文字も、事物とはぜんぜん似ていません。少し似た感じがする身振りや表情という視覚言語にくらべても、似ていない度ははるかに高いです。

それなのに音声と文字による意味の喚起力、つまり意味、枠、筋書き、物語、イメージ、目的などを呼びさましたり、さらには音声と文字をきっかけに、それらの意味を勝手に生み出す力には、想像を絶するものがあります。

そうです。想像力のことです。

この文字の呼びさます、そして文字が勝手に生み出す力は、文字を学習した成果なのでしょうが、そのように言葉で置き換えたところで、不思議さは解消されません。

過剰で過激な想像力

人の想像力は、過剰で過激なのです。逸脱しているのです。

だから、「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字を見て、各人が勝手に猫を想像するのです。

「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字は猫に似ていますか？ 「ねこ」と発音して、その音は猫に似ていますか？

ぜんぜん似ていないのに、猫を想像するのです。あっさり書きましたが、すごいことではないでしょうか。腰を抜かしても罰は当たらないと思います。

*

持論なのですが、言葉は人の作った最強の映像、つまり影だと思います。

話し言葉（音声）や書き言葉（文字）によって、意味という像（イメージ・印象）が浮かんだり、意味の暴走が始まるのですから、これは絵や影や写真や動画と同じく映像と見なしてかまわないと思います。

そんなわけで、写真と動画の話に移ります。

＊

あなたは愛する人の写真を踏めますか？ その人ではなく、ただその姿が写ったものですよ。

愛する人の動画がけなされても平気ですか？ 動画を変なふうに加工作られて、冷静でいられますか？ その人ではなく、その姿が映っただけのものですよ。

あなたの愛するキャラクターやフィクシヤスな人物の映像が汚されて、憤りや悲しみを感じませんか？ キャラクターやフィクションの人物には実体がないのによ。

想像力を消していれば、ボタンが押せる

愛する人の写真を踏める人は、想像力が欠如しているか、想像力を消している人でしょう。

想像力が欠如しているか、想像力を消していれば、平気で文字としての人を、数字としての人を処理したり処分できます。

さらには、文字や数字としての人を大量に処分するボタンを押せるでしょう。いろいろなボタンがありますが、もう何度も、無数に押されていますね。

最終ボタンだけは押す結果にならないでほしいです。祈っています。

Imagine.

#日本語 # 漢字# 和語 # 大和言葉 # 文字 # 漢字 # 鏡 # 影 # 写真 # 映像 # 映画 # 動画# 想像力

なぞって、真似て、なる

＊

なぞって、真似て、なる

星野廉

2022年4月18日 14:34

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

眠れない夜には、こうやって言葉を転がすのです。

(拙文「眠れない夜の遊び」より引用)

目次

「真似る」を「うつる」で説明する

分身

あの世

魂がうつる

心が移る、気持ちに移る

「似ている・似る・似せる」「なる」「かわる」

ある、いる、いく、なる

形でも模様でもなく、顔

「真似る」を「うつる」で説明する

「真似る」と「うつる」はどちらも私の大好きな言葉で、わくわくするのですが、「真似る」を「うつる」で説明してみましょう。

やったことはありません。両者をからませると面白いことになりそうです。

＊

「真似る」と「学ぶ」は同源だそうです。たしかに似ています。「似ている」「似せる」「似る」ともからみそうですね。

言葉を真似ることで言葉がうつる。映る、写る、移る。

なるほど。自分で感心してしまいます。鏡や影みたいに映る。写真やコピー機みたいに写る。ある人から別の人に移る。要するに「伝わる」わけです。

こういう言葉の連鎖、イメージの連鎖が快いです。言葉の世界、イメージの世界、現実の世界がまじわる部分に身を置いているような気分になります。

この三つの世界は、そんなものがあるとしての話ですが、別個に存在するのではなく、三つの輪が重なりあってまじわるような形で「ある」ようにイメージしています。

人は、言葉の世界、イメージの世界、現実の世界という三つの世界を行ったり来たりするとも言えるでしょう。

分身

分身、もう一人の自分、片割れ、影のような存在。これはなかなか魅力的なイメージですね。

鏡、写真、動画、日記、自分で書いた作文、こども、きょうだい、おや——こういったものは分身という言葉でくくれそうです。

分身の相手には何がうつる、あるいはうつっているのでしょうか。

*

分身には、姿（顔・身体）、魂、気持ち、気分、心、記憶、知識、血（血縁）、DNA、癖（表情・仕草・身振り）、声（声の質、話し方、口調）といったものが、うつり（移・写・映）、つたわり、模倣・学習されているのではないのでしょうか？

分身には「うつる」要素が満載なのです。これだけのものが、自分と相手の間で「うつる」可能性があります。あとは「うつる」濃度でしょうか。

頭に思えがこうとすると、ぞくぞくします。さまざまな分身がありえますが、通底するのは「愛おしさ」ではないでしょうか。食べてしまいたいほど愛おしいのです。

官能的で、エロチックにさえ感じられます。そもそも自分以外の自分というのは結合や合体に近いものがあります。結合や合体は別れでもあるわけです。

もともと異なるもの、同一ではないもの同士が出会い、くっつくのですから当然です。異なるものであった痕跡と記憶がある限り、別れはつねに意識されます。

いつか別れ別れになるのではないかという思いがあるからこそ、激しく結びつこうとします。

＊

相手に自分を感じる。他人に自分を見る。外見は違っているのに、血でつながっている。まったく知らない者同士が、遺伝子の検査できょうだい、あるいは親子だと判明した。

前世でつながっていた。前世では一個の人間だった。前世では親子だった。前世で、再会を約束していた。こういうのも、きわめて観念的ではありますが、一種の分身でしょうね。

観念であるがゆえに、燃えてしまうなんてありそうです。人は観念で欲情する生き物です。ポルノがいい例です。

あの世

あの世。天国とまでは特定しません。ざっくりあの世としておきます。

あの世に移る。

いい言葉ですね。移動の意味の「移る」が希望をいだかせてくれます。楽観的なフレーズと言えるでしょう。

あの世に遷る。

「遷る」は都なんかが移転するときに使う漢字のようです。遷都と言いますね。左遷の遷でもあります。変遷、遷宮も思いだします。基本的には「移る」なのですが、用法が限られています。

そうした知識はさておき「遷」という見慣れない漢字、あまり使ったことのない文字に異和感（違和感ではなく）を覚え、異化も感じ、なんとなく「いいなあ」と思ってしまいう自分がいます。

あえて理屈をつけると、「遷」は訳ありっぽいのです。単なる「移動」ではなく、なんか背景に事情がある気がして、「あの世に遷る」なんて書くと、「なんで？」とか「どうしたの？」と呼びかけたくなるのです。

勝手に呼びかけている。ですよ。一人で盛り上がりすぎて失礼しました。

魂がうつる

魂がうつる。魂をうつす。

文字どおりに取ってイメージする、つまり視覚的な絵として想像するのが難しい気がします。観念的であり抽象的なのです。

その身振りや動作をしろと言われても、戸惑います。比喻、暗喩ととらえて、具体的な動作に置き換えないと無理に思えます。

写真、とりわけ肖像や遺影には魂がうつっていそうですね。愛する人、近親者はもちろん、知らない人であっても、その姿が写っていたり映っていると、魂が移っているように思えてなりません。

おろそかにはできないのです。

遺品整理は大変な作業でしょうね。いろいろな物に魂がうつっていると考えると、私にはできそうもありません。自分の生前整理どころか、唯一の肉親だった母の遺品整理もほとんど手をつけていません。

そのくせ、自分は神仏のたぐいは信じていないと信じているのです。魂と神仏という言葉は私の中では結びつかないのですが、人それぞれですよ。

心に移る、気持ちに移る

魂から話に移り、ほっとします。

心や気持ちは、魂と重なる部分がありますが、魂は重い言葉だと痛感しました。

心が彼女に移った。彼の心移りが許せない。心変わりをした。

その計画のほうに気持ちに移りつつある。気持ちが傾く。

ある人から別の人へと、誰かの気持ちに移るよりも、心に移るほうがずっと深刻な気がします。

気を持ちようや心の持ちようと心では大違いですよ。心は本尊みたいなものです。その本尊が移ってしまうなんて、想像しただけで悲しいし、心移した相手が憎くなりそうです。

*

こうやって、言葉を転がすことで、言葉の世界から思いの世界へ、さらには現実の世界を想像することができます。一時的な疑似体験みたいなものでしょうか。

これも、心や気持ちが移ることなのでしょうね。

「似ている・似る・似せる」「なる」「かわる」

「似ている・似る・似せる」「まねる・まなぶ」「なる・なりかわる・なりきる・なりすます」「かわる・ばける・てんじる」

私にとっては失神しそうなほど強烈なわくわくぞくぞく感をいだかせる言葉たちです。

こうした身振りや動作や仕草がぜんぶ入っている作品があります。

パトリシア・ハイスミス作の小説『太陽がいっぱい』と、その映画化された作品である『太陽がいっぱい』です。

以下の記事をお読みいただくのがいちばんいいと思います。

(記事へのリンク省略)

まだこの一連の言葉の連鎖とテーマについては語るものがたくさんありそうですが、いまの体調では無理なようです。

考えただけで息切れがしてきました。

ある、いる、いく、なる

記事の冒頭で引用した言葉の羅列をもう一度眺めてみましょう。

うつる。なぞる。つたわる。似る。似せる。なりきる。なりすます。なる。なりかわる。訛る。まねる。染まる。染みる。溶ける。合う。変わる。化ける。転じる。

こうした動きや姿やありようは、あらゆる生命に見られる気がします。生命、生き物はそうした過程を経ることで「生」をいとなみ、まっとうするのではないのでしょうか。

無生物でもそうしたありようが見られる気がします。たとえば、雲の形、水（液体、気体、固体）、岩・石・砂、光と影のありようが、そうです。長い目で見れば、あるいはごく短いスパンで見れば、生物か無生物かにかかわらず、万物流転という感じがします。

もちろん、人が勝手に見たありようにちがいはありません。人の思いや知覚とは別個に「ある」のでしょうか。

＊

人が「ある・いる・おる」から「いく・生く・活く・行く・ゆく・往く・逝く」や「なる・生る・成る・為る・慣る・馴る・熟る・鳴る・萎る・褻る」へと「うつる」。

いま書いた文はたわむれですが、私には「言えている」ように感じられてなりません。あくまでも個人的なイメージです。

個人的なイメージは、他人には荒唐無稽に見えるものです。

「アホか」「馬鹿らしい」で済ますことができます。それでいいのでしょうか。他人のことがすらすら分かるほうが荒唐無稽なのですから。

＊

言葉にそなわった音と形。これは人の外にあるものです。一瞬で消えていく音声、あるいはしばらくは残る文字の形としてあらわれるという意味です。人の外にありますから、音や形として確認できます。具象とか具体とか物と言えるでしょう。

その音と形が、人に意味やイメージをいだかせます。これは人、しかも各人の中にあるものです。中にあるのですから、確認できません。観念とか抽象と言えるでしょう。

＊

外にある言葉の音と形は、誰もが生まれたときにすでに外にあったものです。それを

真似て学ぶことができるのは、自分の外にあるからです。その外にある音と形を、耳や目や指や手で知覚し、なぞることによって、真似て学ぶわけです。

繰り返えし繰り返えしなぞり、真似ます。学習ですね。これは一生続きます。

*

言葉の音と形は、人の外にあって、人の中に入ってきます（なぞる・まねる）。そして出ていきます（はっする・はなす・なぞる・かく）。

人の中でどうなっているのかは確認できません。想像するしかないのです。手がかりは中から出てきたものでしょう。とはいえ、出てきたものもまた、音と形なのです。それしか確認できないのです。

*

どういうことなのでしょう。なんでなのでしょう。

不思議ですね。謎です。さっぱり分かりません。知ることもできない気がします。

言葉ほど不思議なものはありません。なぜ、これほど言葉の不思議さにこだわるのかと言いますと、言葉は意味をになっているからです。人は意味に振りまわされているからです。

*

意味には二つあります。一つは、辞書に載っている言葉の語義です。もう一つは、「人生の意味って何？」みたいな使い方をするときの意味です。

この二つを意味という言葉になわせることには無理がある気がします。それぞれ別の言葉をあてるべきだと思います。だいいち、ややこしいじゃありませんか。

「人生の意味って何？」「人生の意味？ 辞書を見れば」

＊

「無意味」の意味が辞書に載っているのは不条理でナンセンスです。「意味」の意味が辞書に載っているのはシュールなギャグです。

なにしろ、人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だから、こうなるのです。

これがずっと続いて今日にいたるのです。なぜか。これからも続くでしょう。なぜか。

＊

ヒトは孤独な生き物です。言葉と意味は地球上でヒトだけに通じるギャグです。ヒトのひとり相撲なのです。ヒト同士でもよく通じません。一人ひとりのひとり相撲だからです。世界情勢を見ると悲しいほど明らかです。自分のまわりを見ると嫌になるほど明らかにはずです。

＊

半分冗談はさておき（半分は本気です）、次に参りましょう。

形でも模様でもなく、顔

ある、いる、いく、なる。

この言葉を並べて、口で転がし、文字としてなぞり、それをたぶん頭か子心か気持ちか魂の領域で、並べ、転がし、なぞるのでしょうか。

外と中。その両方を行ったり来たりしているかに見える言葉。声はたちまち消えます。文字だけが居続けます。消さない限りは残るのです。

文字は、うつしている、うつっている気がします。

何を、何が、何に、と関係なく、うつしている、うつっている。

*

文字は、答えてくれそうもありません。

外にあり外である文字は、なぞるしかなさそうです。目でも指でも体でもいいです。動かす中で触れるしかなさそうです。

こちらから働きかけない限り、文字はただの模様としてあるだけなのです。文字が文字であるためには、文字が文字になるためには、こちらが文字になる必要があるのかもしれない。

なぞって、真似て、なるのです。赤ちゃんのように。赤ちゃんだったころのように。赤ちゃんのころほど「なる」である時期は、人にはないと思います。だんだん「いる」「ある」になって「いく」のです。さいごはもちろん「いく」です。

文字はたぶん顔なのです。形でも模様でもなく顔です。

*

とりとめのない文章にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#文字 # 言葉 # 作文 # 顔

うつせみのあなたに 短文集 その5

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
